

19世紀イランにおける貿易の展開と 社会経済構造の変容 I

後 藤 晃

はじめに

1. 「世界経済」の枠組と中東
 - (1) 17～18世紀貿易における西欧と中東
 - (2) 画期としての1830年代
2. 19世紀第一四半期におけるイランの貿易構造
 - (1) 19世紀初頭の地域間貿易
 - (2) 19世紀第一四半期におけるペルシア湾貿易の性格
3. 対イギリス貿易の発展と貿易構造の変化
 - (1) トラブゾン・ルートの開設とイギリス綿布、生糸の貿易
 - (2) 19世紀中期の貿易統計
4. 19世紀後期の貿易構造と伝統的手工業の衰退
 - (1) 対ロシア貿易の構造
 - (2) 1889年のイラン貿易統計
 - (3) ペルシア湾貿易の発展と貿易構造
 - (4) ヨーロッパの工業製品の流入と伝統的工業の衰退
5. 輸出作物生産の発展
 - (1) 生糸
 - (2) 米
 - (3) 綿花
 - (4) アヘン

はじめに

19世紀の後半期は中東の社会経済の大きな変容期にあたる。前資本主義社会と20世紀後半のいわゆる従属的な資本主義社会をつなぐほぼ一世紀にわたる植民地および半植民地半封建的社会が形成された時代にあたる。これは、いうまでもなくイギリスで産業革命が完了したことによる産業資本の発展とこの西欧への波及によって、西欧の資本主義国を中心とした世界経済が拡大し、中東をこの世界経済の枠組に組み込んだことの結果であり、中東の経済構造が変化して新たな社会構成が生まれたのが19世紀後半である。中東史において、この一世紀の間を半封建的社会として一つの歴史範ちゅうを設定することの意義は、西欧中心の資本主義世界に従属化する過程で資本主義の内在的発展の可能性が塞がれ、土着の生産諸関係が利用、再編される形で特有の土地所有形態を成立させ蓄積形態をとったことによる。もっともこの歴史区分は中東にのみ有効ではなく、アジア・アフリカの多くの地域が同様の過程をたどったわけであり、中東はそうした地域の一部であつたにすぎない。

中東の貿易を通した西欧との関係には長い歴史がある。16世紀までは活発な遠隔地貿易があり、また大航海時代以降遠隔地貿易が徐々に後退した後も特産品貿易が盛んにおこなわれた。オスマントルコは東地中海を領域におさめており地中海貿易の主要な一端をなしていたし、17世紀のイランはペルシア湾やトルコ経由によるイギリスやオランダとの貿易を活発化し生糸や手工業品を西欧に輸出していた。一方、西欧の毛織物は中東に輸出されたが十分な市場を見出すことはできなかったのであり、この時代はヨーロッパ資本主義との関係が、中東を世界経済に包み込む形でその内部の社会経済構造に大きく作用を及ぼすことはなかったといつてよい。19世紀にはいると、中東諸地域で、いわゆる「西欧のインパクト」によって近代化の試みがみられ、工業化が進展している。

エジプトではモハマッド・アリの強権による国家主体の工業化が試みられ、イランでもこの時期手工業生産が伸び輸出も拡大した。しかし、19世紀中期までにいずれも挫折した。

19世紀中期以降の中東の社会経済の変容は、西欧資本主義国との間の経済的力関係に圧倒的格差が生じたことを基本的契機としていた。西欧の総資本の要求による製品市場の拡大は、世界に市場の網の目を形成した。中東もまた綿製品の輸入が急増し、国際分業体系に組み込まれることになった。トルコやイランは、19世紀を通して国家主権を維持してきたために西欧による直接的な暴力的強制を受けなかったという点でインドなど植民地化した地域と異なる。しかし、自由貿易を強要され、1880年代以降には商業・金融および各種利権の供与によって強い影響化におかれ、この過程で安価な工業製品が都市からさらに農村にまで流入し、商品経済化を浸透させるとともに、都市および農村の伝統的な手工業を停滞ないし衰退させた。トルコでは、1820年に綿製品輸入は国内消費の5%以下であったのが1910年代には80%を占めるまでになった。そして一方で、工業原料・食料の供給地化を直接、間接的に強制された。農業社会は、農産物の世界市場が開けたことで農産物の商品化と作付け転換が進み、地域自給的形態から輸出を目的とした商品作物栽培が拡大し、いわゆる商業的農業が展開するのである。

こうした世界経済への包摂過程は、中東社会の社会構成の変容を伴った。西欧の商品の市場化が進展し、手工業が停滞ないし衰退し、また輸出作物生産が発展することで、対西欧貿易とヨーロッパ製品を国内市場に結ぶ商人の系列が発展した。つまり、従来の流通機構は西欧の工業製品の市場拡大を担う形で改編され、従属化過程でこれに従事する商人が主要な社会層をなした。また商業的農業の発展は、輸出作物生産に強い利害をもつ半封建的な地主層を成立させた。共同体の首長であるハーンや徴税請負人などの封建勢力は、農業経済の一定の展開の中で農産物輸出に利害をもち、農業経営に関わり始めた。土地の商

品化はまた高収益でもおかる農業に対する商人や都市の社会層の地主化の追求を進めた。すなわち、輸出作物生産を契機にして商品生産を目的とした地主制を発展させることになったのである。中東では、一般に地主制は農民の小商品生産の展開を前提として成立したものではなかった。国外における特産物市場の形成が、旧封建勢力および都市の特権層や商人の地主化を進行させ、さらに都市における商品経済の展開はこの都市市場をめざす商品作物の生産をさらにすすめて20世紀の地主制の全面的な発展を牽引したのである。

筆者が研究の課題としているのは、19世紀後半から20世紀前半にかけて中東、とくにイランの社会経済構成体の特質を検証することにある。これに19世紀の西欧資本主義との貿易が主要な契機をなしたことは、以上の論理的筋道から説明可能と思われる。本稿はこの準備的考察として19世紀イランの貿易構造と産業構造の変化の過程を限られた資料をもとに叙述したものである。

1. 「世界経済」の枠組と中東

(1) 17～18世紀貿易における西欧と中東

中東の対西欧貿易は、西欧の資本主義形成期つまり重商主義期にかなり活発であった。17世紀にはすでに従来の遠隔地交易は背後に後退し、工業製品やその原料や加工品の貿易が重要性を高めていた。西欧はマニュファクチャーの発展で毛織物を各地に輸出したが中東もまたその重要な市場としてあった。絹織物工業の発展はトルコやイランからの生糸の輸入を伸ばし、中東の手工業品の輸出もこの時代はかなり増加したのである。

東地中海貿易ではイタリア諸都市の衰退後フランスが重要な役割を果たし、対トルコ関係ではキリスト教徒の保護を名目にトルコ領内における外国人の自由な商業活動を認めさせたキャピチュレーション協定が結ばれ、対エジプト関

係でもフランスの実質的な独占を認める通商関係が存在した。マルセイユはこの東地中海貿易の拠点として繁栄した。フランスの毛織物は薄手で東地中海地域では評判が良かったといわれている。トルコ国内や一部イランの生糸はイズミールやイスタンブルに集荷されて、ここからヨーロッパに向けて輸出された。

イギリスとオランダはおもにインド洋を經由してイランやアラビア半島地域と貿易関係をもった。オランダ東インド会社は1634年頃までイランの生糸を2万lbs輸入しており、イランの生糸輸出は1670年には1,900トンに達したと推計されている¹⁾。この量は19世紀の輸出の最盛期においても及ばない量である。また、サファヴィー朝は手工業を育成保護し、17世紀にはその著しい発展をみた。とくに織物では錦などの高級品から各種絹織物、綿織物が生産を伸ばし、各地に特産品が生まれた。この一部がヨーロッパやインドその他の地域に輸出され、交易路の安全、便宜が権力によってはかられたのである。

この貿易の発展は西欧資本主義世界の枠組への中東の包摂の過程であったわけではない。この点で19世紀中期以降の貿易とは性格を異にしている。ウォーラスティンは、西欧を中核とする「世界経済」の地理的広がりにおいて、その内部に位置する辺境とその外側とを区別する特質について次のように述べている。「世界経済の辺境」は基本的に低位の商品、つまり労働報酬の低い商品を生産することで、全体として分業体制の一環をなしている地域であることであり、他方「世界経済の外側」というのは、別の世界システムに属するゆえに世界経済間の貿易はあっても、主として奢侈品交易しかもたない地域のことである²⁾。17, 18世紀の中東と西欧間の貿易はその主要品目が毛織物、生糸、綿織物からなりこれらは奢侈品ということではできない。生糸は手工業原料であり各種織物は衣料品として消費生活において重要性が高かったのであり、貿易自体が奢侈品貿易にみられる偶然的性質のものではなかった。しかし中東からの輸出品は労働報酬の低い商品ではなかったし、両地域間に明確な分業関係が

形成された訳でもなかった。つまり中東は少なくとも18世紀までは全体としてウォーラーस्टインの「世界経済」の枠組において辺境として位置づけることはできない。

西欧との貿易が中東経済の変容に強いインパクトとして作用したことも確かである。トルコでは17世紀以降、商品経済の発展の中で地域的に商品作物生産を進める土着豪族層による農業経営の成立をみる³⁾。イランにおいても貿易の発展が社会変容の契機となったと考えてよい。イランは西欧との間の距離が大きく、対ヨーロッパ関係は貿易に限られトルコにおけるキャピチュレーションのような関係は取り結ばれなかったが貿易は盛んであった。そして社会変容はサファヴィー朝の国家体制の性格、つまり家産制国家としての特徴を強く反映したものであった。アシュラフによると、17世紀イランの都市の手工業と商業は国家の強烈的な管理下にあり、都市に発達した手工業ギルドやマニュファクチャーは官僚の支配、管理のもとであたかも国王の所有する工場の様相を示し、貿易を担う商人は国王のエージェントにすぎなかった⁴⁾。生糸輸出に伴う養蚕業の発展も農業への国家管理の強い農場の形成によったのであり、商業的農業の発展による農村の商品経済化と商業的地主の形成を伴うものではなかった。つまり、西欧との貿易の発展はイランにおいて新たな社会構成の成長を促すことはなかったのであり、家産制国家を揺るがすどころか強化し支えさえしたのである。

17世紀末にサファヴィー朝が衰退すると、イランの貿易は18世紀の国内の混乱と地方勢力、部族の分立が続くなかで衰退した。国内的には貿易ルートของ安全を保障し貿易を管理する権力の不在、また政治的分権化に伴う経済の地域閉鎖化が貿易の縮小と都市工業の衰退をまねいた。もっとも専制国家の衰退が貿易の衰退をまねいたのか、またその逆であるかについては議論のあるところであり、西欧中心の当時の「世界」における分業関係の発展がその外部に位置したイランと西欧の間の貿易の減少に少なからず影響を及ぼしたことは事実であ

る。

いずれにせよ18世紀にはイランの貿易とくに対西欧貿易は縮小し、国内的にも地域閉鎖化と自給化を強め都市の手工業は衰退した。この社会の状態をアグラハミアンはモザイク社会として描いた⁵⁾。つまり、分立孤立して相互に対立する共同体の集合体であり商品経済の展開の遅れた社会とした。国の内外における政治経済的変動のもとでイラン社会は西欧との経済及び貿易関係を著しく希薄化したのである。

「西欧のインパクト」は、イランの世界経済への包摂という側面で見れば、19世紀に入ってはじめて経験するといつてよい。

(2) 画期としての1830年代

西欧と中東の諸地域との間の貿易に構造的な変化が生まれ、「西洋のインパクト」が中東の经济社会構造の変容を導き、中東が国際的分業構造に組み込まれる時代はその画期を1830年代におくことができる。産業革命を經過し産業資本を確立したイギリスとの貿易は、1830年代に入ってイスラム世界の保護者的位置にあったオスマントルコ帝国、およびその東側に位置するイランにおいて急速に発展する。

トルコ（アナトリア）の場合、イギリスからの輸入額の推移をみると、1827-29年には年平均42.9万ポンドであったが、1830-34年には103.6万ポンドへと一気に2.4倍増加しその後も高い伸びを示した。エジプトも同様で、4.9万ポンドから13万ポンドへ2.7倍増加した⁶⁾。イランについては、同時代の貿易統計を欠くために数字を示すことはできないが、後に詳しく示すように時期的にはトルコ、エジプトより若干遅れて輸入を急増した。

輸入品目でみると、トルコでは1830-34年にイギリスからの輸入の8割を綿製品が占めた。18世紀の主要輸入品であったヨーロッパ製の毛織物、絹織物はそのシェアを大きく低下させ、機械制工業によるマンチェスターの綿織物が

表1 19世紀前半におけるトルコ、エジプトの
イギリス綿製品輸入額

(£1,000)

年次	トルコ	エジプト
1824	567	
1825-26	466	
1827-29	326	28
1830-34	825	82
1835	1,063	132
1836-39	1,200	198
1840-44	1,366	179
1845-49	1,833	307
1850	1,975	353

(出所) Owen, R., *The Middle East in the World Economy*
1800-1914, London, p. 85

圧倒した。19世紀前半期における輸入をとくに綿製品に限って示したのが表1だが30年代に最初の拡大期を迎えている。この貿易構造の変化はいうまでもなく中東に特殊であったわけではない。インドなどアジアの諸地域においても1830年代はイギリス綿布が大量に流入しはじめた時期に当る。18世紀には綿布はむしろインドからヨーロッパに向けて輸出された。とくに18世紀最後の10年はこの輸出額がピークに達している。しかしその後は急激に減少して逆にイギリスからアジアへの綿布輸出が急増し、1820年頃には後者が額で凌駕した。イランの綿布輸入先もまた1830年代を境にイギリス製綿布がインド綿布を圧倒している。

1830年代を中東の貿易構造が変容した転換期とする根拠としては、この時期を境に産業資本の発展によるイギリス綿布の流入が激しく進んだことに加えて、同じく30年代に中東諸国と西洋諸国との間に不平等な通商条約が締結されたことをあげることができる。イギリスの東地中海貿易は17世紀以降レバント会社が独占権を握っていたが、1825年にこの独占権は廃止された。またイランやア

ラビアに対するインド洋貿易を握っていた東インド会社の独占も1833年に廃止され、重商主義期の遺制としての貿易上の制約が取り除かれた。さらに通商条約によって中東各国は関税自主権を喪失し、治外法権を許与して「不平等な」自由貿易が外部的に強制されることになった。

トルコでは1838年の英土条約が、西欧諸国との不平等な通商条約の最初である。トルコはキャピチュレーション政策によって外国人商人のトルコ国内の経済活動に対して比較的寛容であったが、この条約によって貿易関税は3～5%に抑えられた。トルコ国内の商品流通を抑制してきた国内の流通課税の率も低く抑制された。エジプトもまたトルコの属領であったことからこの条約が適用された。イギリスの綿織物を中心とした工業製品の輸出にとっての貿易上の障害が取り除かれた訳である。同様の内容の通商条約はまもなくトルコとイギリス以外の西欧諸国との間にも結ばれた。

イランでは、コーカサス、グルジア地方の領有をめぐるロシアとの戦争で敗北をきしたのを契機に通商条約が結ばれている。1828年のトルコマンチャイ条約は、領土問題、治外法権の許与など政治的内容をもっていたが、これに輸入関税を5%の低率とし、またロシア商人のイラン国内での自由な商業活動を認める貿易上の取り決めが付加された。条約締結のロシア側の意図としては商業的進出を通して、南下政策を実現していくことにあったことは明らかである。しかし当時の農奴解放前のロシア工業は、農奴身分の労働者によるマニュファクチャー段階にあり原蓄を経過していなかった。ロシアの産業資本の発展は西欧と比べてかなり遅れ1870年代であるとするのが通説である。したがってこの条約がその後しばらくイランとロシアの貿易構造に強い影響を与えることはなかった。貿易は1880年代まで比較的停滞的であり、貿易品目にも大きな変化はみられない。隣接地域間の特産品貿易という性格が強くまたイランからの工業製品の輸出が続いた。しかし、トルコマンチャイ条約と同様の貿易上の取り決めが、まもなくイランと西欧諸国との間で締結される。通商協定のイランへの

影響は、ロシアよりもむしろすでに産業資本を確立させていた西欧、とくにイギリスとの関係において大きかった。

すなわち、西欧と中東との貿易構造の変化と自由貿易体制への中東の取り込みは、その時代的画期を1830年代においてよいだろう。西欧中心的見方からすれば、「世界経済」の中に中東の組込みが制度上一応の完成をみた時代といえるのである。

2. 19世紀第一四半期におけるイランの貿易構造

(1) 19世紀初頭の地域間貿易

19世紀前半期のイランの貿易については資料が乏しいためにその実態を正確にはつかみ難い。18世紀を通してイラン国内は遊牧民部族や地方権力が分立し、抗争が繰り返されていた。ようやく1794年に到ってカージャー朝が成立し、統一国家の体裁をとることになったが、地方は部族による比較的自立的権力機構が存続し、貿易に対する中央のシステム化された管理機構は存在しなかった。したがって当時の貿易の様子を知るためには、イランと貿易関係をもった国々、とくにイギリスとロシアの各種の報告書などに依拠しなければならない。しかし、インドなど植民地化した国と異なり、イランは19世紀後半に至って従属化を強めはしたが独立を維持してきたのであり、これらの国の資料も自国と関わる部分で残してきたにすぎない。とくに19世紀初頭のイランは、18世紀から続く対ヨーロッパ貿易の衰退期にあたり、ヨーロッパにとってイラン貿易は魅力に乏しく、資料もそれだけ乏しい。こうした資料面での制約を条件として、まず19世紀初頭のイラン貿易構造の概観をさぐってみようと思う。

イギリス東インド会社の高級職員であったマルコームは、1800年頃のイランの工業と貿易に関するレポートを本国に送っている⁷⁾。このレポートに記され

19世紀イランにおける貿易の展開と社会経済構造の変容 I

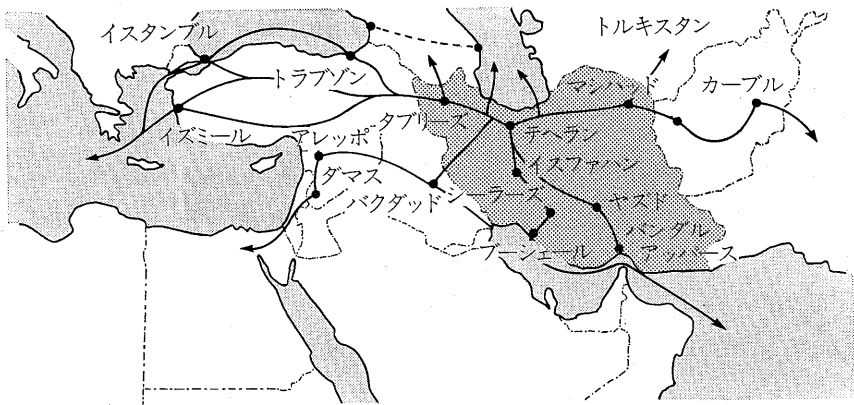
たイランの貿易品目を貿易ルート別に整理したものが表2である。1800年当時、イランの貿易額は250万ポンドと推定されている。この数値は、貿易ルートごとの貿易の推定額を積み上げたものでかなり大雑把だがおよその貿易規模を知ることにはできる。100年以上前の1670年代に、オランダに対する生糸輸出だけで200万~250万ポンドに達していたことをかんがみると、19世紀初頭のイランの貿易規模はかなり小さかったことがわかる⁸⁾。

また当時は貿易のほぼ半分がイランを経由するだけの中継貿易であったから、純貿易はさらに小さかった。貿易のルート別構成をみると次のようである。

アフガニスタン	32%
オスマントルコ	28%
インド	23%
ロシア	15%

またイランの貿易ルートを地図上に示したのが図1である。イランの主要な消費地、また手工業都市は、イランの北部と中部に位置し、各ルートはこの主要都市から貿易拠点に向かって走っている。19世紀には、国内の商品の輸送は陸

図1 19世紀イランの交易ルート



路をキャラバンに依存し、道路は未整備で、遊牧民諸部族が各地に勢力を張り略奪が頻繁であったため、輸送は高いコストを余儀なくされた。この状態はカージャー朝が安定化する19世紀中頃まで続いたようであり、南イランでは、1870年代においても数多くの略奪者が都市の近くまで出没したといわれている⁹⁾。したがって内陸ルートを長距離輸送する商品は比較的高価な奢侈品に限られていたと考えられる。

海路はペルシア湾のブーシェール、バンドルアップースの港からインド、アラビア半島、東アフリカ、さらにヨーロッパとつながり、インドから東は中国や東南アジア地域と結ばれていた¹⁰⁾。18世紀には、インドおよびその東方は、イギリス、オランダ、フランスの植民地下にあり、東インド会社が本国とこの地域の貿易に独占権を握っていた。しかし、イランとインド洋をかこむ諸地域との貿易は、実質的にインド人、アラビア人、イラン人によるダウ船が主流をなしていた。ペルシア湾の港から、イラン国内へはシーラーズ、ヤズドの都市を経由して1,000km以上離れたイラン北部に内陸ルートで結ばれた。またペルシア湾からバグダットを経由してイランに入るルートもあった。

陸路は隣接する諸国にルートが通じており、東方は、マシハッドを経由してアフガニスタンのヘラートにつながり、ここからさらにインドにのびていた。カスピ海の東には、19世紀後半にロシアの南下政策によって征服、併合されるまでブハラ、ヒバ、コーカンドの国があり、マシハッド経由で、またイラン北東部からこれら諸国へつながるルートがあった。ロシアへはカスピ海やコーカサスのチフリスを経由するルートが存在した。チフリスは後にロシア—イラン貿易の拠点として繁栄した。西は、タブリーズ経由で陸路アナトリアを縦断し、トルコのイスタンブルやイズミールの商業・貿易都市につながり、またバグダット経由でアレppoやダマスカス、さらにここからイズミールやエジプトにつながるルートがあった。

これら各ルートを経由する貿易の特徴をマルコームの資料から個々に見てみ

よう。当時、イランはインド、ヨーロッパ商品の中継ルートでもあったから、輸入品のかなりを他地域に再輸出される中継品が占めていた。

インド貿易

表2で対インド貿易に分類されているのは、ペルシア湾経由のもので、後に述べるアフガニスタン経由は除かれている。ペルシア湾経由の貿易は、ダウ船によるインド洋をめぐる交易の長い歴史の中で位置づけることができる。17世紀以降、オランダ、イギリスの東インド会社がこれに加わりイランからヨーロッパへの生糸輸出が発展したが、18世紀には衰退し、イラン産品とインドおよびアジア地域の産品の交易がその主要部分をなした。

対イギリス貿易は、当時はおもにボンベイを経由しており、表2のインドからの輸入にはボンベイ経由のイギリス商品が含まれている。しかし、そのシェアは比較的小さかった。ロンドンの“The Court of Directors”は、18世紀末にイランとの貿易の拡大、とくに毛織物の輸出の可能性をさぐるべく委員をイランに派遣した。しかし、その結論は悲観的なもので、報告書には次のように記されている。「イギリスの工業製品の海路からの（インド洋経由の）輸出は、会社による取引も個人取引もペルシア帝国とその周辺の国が安定した政府を確立するまでは発展の可能性がない。またこの条件が整ったとしても、ロシアやとりわけフランスに対してイギリスが製品輸出により優位な条件をもち得るかは疑問である。」¹¹⁾イラン国内の混乱と中央政府の脆弱さによって貿易コストが高く利益は小さかったようである。また毛織物輸出についてはフランス製の方が薄手で中東の人々の趣向に合い、イギリス製品の競争力は弱かったのである。

ペルシア湾経由の対インド貿易はイランの入超で、輸入が輸出のほぼ2倍に達した。輸入品目をみると、インドおよびイギリス産品とインドを中継した東方の産品とに分けることができる。前者にはインド産綿布、綿糸それに染料、

表2 1800年頃のイランの貿易

貿易相手国	輸 入	輸 出
インド	綿織物, 綿糸 毛織物 香辛料(コショウ, ジンジャー, ターメリック, カルダモン) 染料(インディゴ) 陶器, 砂糖, 砂糖菓子 金属(鉄, 銅, 鉛, 錫) ヨーロッパ製品	生糸, 絹織物 毛織物, カーペット 香辛料(サフラン, ミルラ) 小麦, 乾燥果実, 塩付け肉 たばこ 真珠
カブール (アフガニスタン)	織物(カシミヤショール, サラサ, チンツ) 染料(インディゴ)	ヨーロッパ製織物 サテン, ベルベット イラン製絹織物 ケルマン(イラン)製毛織物 イスファハン製金布, 粗布, ブロケード 宝石
ロシア	金貨, 銀貨, 鉄貨 ヨーロッパ製綿布 ベルベット, カシミヤ, チンツ, ガラス製品, 時計, ピストル 皮(ラムスキン等) 金属(鉄, 銅, 鉛, しんちゅう)	生糸, 絹織物 イスファハン製金布 イラン製粗布, チンツ, 綿糸 インド製チンツ ラムスキン, フォックススキン, 米, 香料 真珠
トルコ	金貨, 金棒, 宝石, 琥珀 ヨーロッパ製品(スランス, ベネ チアのウール, その他の織物) ダマス, アレッポ製織物 ガラス製品, 辰砂, 白鉛, 鋼	生糸, 絹織物 カシミヤショール 粗布, イスファハン製の布 香辛料(サフラン) 染料(インド製インディゴ) たばこ, 真珠
ブハラ	ラムスキン 綿糸 砂金	金布, 綿布, ブロケード 染色されたラムスキン 生糸, 絹織物, 真珠
アラビア	真珠 香辛料, コーヒー 粗布 アビシニアの奴隷	カーペット 小麦, 乾燥果実 染料(red dye) たばこ, バラ水

(出所) Malcom, J., The Melville Papers, London, 1830, in EHI, pp. 262~267 より作成

砂糖、イギリス産の毛織物、後者には砂糖、香辛料、陶器、スズがある。砂糖、香辛料、スズは蘭領のインドネシア、陶器は中国の産品である。この輸入品の中で、インド産の綿布の占める割合が非常に高かったと推測される。サラサは高級品から大衆消費品に至るまで種類が多く、ベンガル、マドラス、ボンベイの各港から運ばれてきた。

18世紀中ごろから19世紀初頭まではインド綿布の輸出が盛んな時代であり、インド洋に面した地域はもとより、ヨーロッパ、エジプトにも大量に輸出された。イギリスが産業革命をほぼ完了した1830年頃まで、インド綿布は世界商品としての地位にあったのであり、イランにおいても舶来品として珍重され、その一部は、イランを經由してロシアやトルコ方面に再輸出もされた。輸入染料はインディゴである。これはイランの織物工業に染料として使用され、この一部もトルコに再輸出されている。

インド経由のヨーロッパ製品は毛織物である。ただ、先に示したようにその輸出ははかばかしくなかった。

一方イランからの輸出をみると、そのほとんどをイラン産品が占めた。チャウドリは、1750年以前のペルシア湾からの輸出品としては次の品目をあげている。

綿、モスリン、バラ水、パール、カーペット、生糸、ワイン、純血種の馬、
デーツ、塩、魚¹²⁾

またマルコム¹¹⁾の資料では、1800年にペルシア湾からのインドおよびインド経由の輸出は生糸、毛織物、カーペット、サフラン、小麦、乾燥果実、タバコ、パールである。これら品目から言えることは、イランからは、綿や生糸の織物の原料や半製品、それにイランの特産品としてのカーペット、シヨール¹²⁾の手工業品や農産品、食料が主たる輸出品を構成していたことがわかる。

アフガニスタン貿易

表2においてアフガニスタンとの貿易品としてあげられている製品には、アフガニスタンを中継するインドとの貿易品が相当含まれている。イランの輸入品は、カシミヤショール、チンツの織物と染料のインディゴからなっている。このアフガニスタンからの輸入は地域別では最も額が大きく全体の3分の1を占めているが、アフガニスタンを経由したインド産品がかなり含まれている。とくにパンジャブ地方の工業製品は、アフガニスタンからイラン東部、さらに中央アジア市場に向けてかなり輸出された。したがって、インドからの輸入はペルシア湾経由とアフガニスタン経由を合せるとイランの輸入全体の半分以上を越えていると推定される。

イランからアフガニスタンに向けて輸出された商品は大きく二つに分類できる。一つは、織物を中心としたヨーロッパ製品であり、一つはイラン産の織物と生糸である。ヨーロッパ製織物は、地中海からトルコ経由でイランのタブリーズ、テヘランを通してアフガニスタンに再輸出された中継貿易品であるイランのトルコからの輸入品にベルベット、フランスやベネチアの毛織物、その他ヨーロッパの織物の品目があるが、この一部がアフガニスタンに再輸出されたと考えられる。イラン産の織物はイスファハン、ヤズド、ケルマンの主要な織物工業都市の特産品であり、毛織物、絹織物の高級品から粗布にいたる多様な品目からなる。イランの織物は、インド、アフガニスタンだけでなく、トルコやロシア、ブハラ等の中央アジアにも輸出されており、主要な輸出品を構成している。

イランのインド貿易は、ペルシア湾とアフガニスタンを経由する2ルートでおこなわれたが、この特徴はおおよそ次のように整理することができるであろう。第一に、いずれの国も都市の手工業の発展があり、繊維製品を中心とした手工業製品は輸出品として輸出の主要品目を構成し、この相互の交易がみられた点である。インド綿布はイランの都市の上、中層が使用する高級品だけでなく、大衆消費的な粗布までがイランに輸出され、他方イランからはおもに羊毛

製品がインドに輸出されている。イランの工業は、サファヴィー朝による保護がおこなわれた17世紀と比べるとかなり衰退してはいたが、当時のイラン諸都市では、後にのべるように特産品としての織物など手工業品の生産が盛んで、国内市場を満たすとともに周辺地域に輸出された。この一部がインドにも輸出されたのである。第二には、工業原料の相互の輸出である。イランからは絹織物の原料として生糸、またインド綿布の原料として綿花の輸出がみられた。

当時、イランの中部、南部都市では、商人の対インド貿易への関心が高く、インド商人のイラン都市での活躍も目立った。イランで活躍した商人の中には、イラン社会でかなりの影響力をもったものもあり、19世紀前半にシーラーズに住んだ Nur Al-Din の場合、その社会的威信の裏付けとしていくつかの村を所有し大土地所有者となった。彼の所有地は知事によって免税の特権が賦与されていた¹³⁾。また時代は下るが、19世紀中頃にバンダルアッパースからの内陸ルート沿いに位置した工業都市ヤズドでは10人のインド商人が活躍していた¹⁴⁾。

トルコ・ロシア貿易

この2国との貿易は、手工業製品、原料など地域の特産品の交易という面では、対インド貿易と同様の性格をもっている。しかし一方で、対ヨーロッパ貿易はほとんどこの2国を経由しておこなわれ、とくにトルコ貿易はその割合が大きかった。ただ対ヨーロッパ貿易のシェアがどの程度であったかは不明である。イランからヨーロッパへの輸出は、イスファハンの金布などがみられるが、主要な品目は生糸である。生糸輸出は18世紀に衰え、19世紀前半に復活するのであり、輸出額としては1800年頃にはまだ小さかった。トルコではブルサが絹織物の主産地であったが、19世紀初めにヨーロッパ製の絹織物におされて衰退し、ヨーロッパへの輸出のための繭、生糸の集散地へと変貌していた¹⁵⁾。イランの生糸はトルコ製品とともに多くは、イスタンブル、イズミール経由でヨーロッパに輸出された。

ロシア、トルコ経由で輸入されたヨーロッパ製品は、フランスやベネチアなどの織物、ガラス製品、時計などがある。これらはイラン国内で消費されたと同時に、イランを中継してアフガニスタンなど東方に再輸出されている。当時、東地中海貿易はイギリスの勢力が弱く、フランスが貿易の8割前後を占めていたといわれている。したがって、トルコ経由によるイランの対ヨーロッパ貿易はフランスの比重が高く、マルセイユはその貿易拠点を作した。イランとヨーロッパとの貿易は、ペルシア湾がイギリス、東地中海がフランス、北がロシアで三分されていたとよく、イギリスとの貿易は1800年頃はまだ相対的に小さかったと言ってよい。以上から19世紀初頭のイランの貿易構造がおおよそ明らかになったと思うが、さらに整理すると、次のような特徴をみてとれる。

第一に、イラン産品の輸出品目の中心は、各種織物と生糸からなっている。ともにロシア、インドを含む周辺地域とヨーロッパに輸出された。生糸は19世紀に入り生産を拡大するが、19世紀初頭の輸出額はまだ小さい。マルコムムの資料によると、この時代、イランの各都市はそれぞれに特産品を生産し、家内工業とマニュファクチャーの存在が確認されている。イスファハンでは金のブロード、綿の粗布などの織物、ラムスキンの帽子、剣などの武器、馬具、金属器が生産された。ヤズドでは、絹織物、カーペット、フェルト、ショール、綿の粗布が生産され、イギリス製の「ダマスク織」に似せた織物も作られた。カーシャンでは、絹織物やカーペットが作られた。その他、ラシト、シーラーズ、ハメダンの諸都市で手工業が盛んであった¹⁶⁾。当時、都市手工業品の国内における市場は、都市とその周辺に限られた。農村では後にのべるように農村地域内部における分業により地域自給的性格が強く、都市の手工業製品の市場としては狭かったと想定される。都市の工業製品は、農村からの余剰を基礎にした都市経済において成立した都市市場を満たしてさらにイランの周辺地域に輸出されていた。

第二に、その他の輸出品としてタバコ、綿花の工芸作物、サフラン、小麦、

19世紀イランにおける貿易の展開と社会経済構造の変容 I

米、乾燥果実の農産品がある。しかし、この輸出は主に農業余剰の輸出であり、輸出作物として生産されたものではない。また輸出先は隣接地域に限られていた。米や小麦は早魃の時に隣国に輸出されたかなり偶然的性質のものであった。

第三に、輸入は、再輸出分を除く純輸入で見ると織物の占める比重が高い。これはインド綿布とヨーロッパの毛織物、絹織物が中心で、輸入額が小さかったことから国内の織物と競合することはなかったと考えてよい。その他の輸入品は、宝石、ガラス製品などの奢侈品と金属や染料などイランの手工業の原料からなっていた。すなわちイランの貿易は、周辺およびヨーロッパとの特産品の貿易としての性格を強くもった。

最後に、中継貿易が貿易額の半分を占め、その割合が非常に高いという特徴がある。表2からわかるかぎりでは、ヨーロッパ製品、インド綿布、インディゴ、パール、宝石がイランを経由する中継品である。伝統的な内陸交易路 またインド洋と内陸とを結ぶ交易ルートがイランを通過しており、19世紀初頭の交通輸送の条件下で、インドとトルコ、ヨーロッパ、トルコまたアラビアとアフガニスタンおよび中央アジア方面の遠距離交易路がイラン国内の諸都市を經由して存在していた。この中継貿易は19世紀半ば過ぎまで続いた。

表3 イランを中継する商品とその経路

インド綿布 インディゴ	インド → $\left[\begin{array}{c} \text{ } \\ \rightarrow \text{アフガニスタン} \end{array} \right] \rightarrow \text{イラン} \rightarrow \left[\begin{array}{c} \rightarrow \text{ロシア} \\ \rightarrow \text{トルコ} \end{array} \right]$
ヨーロッパ製品	ヨーロッパ → $\left[\begin{array}{c} \rightarrow \text{トルコ} \\ \rightarrow \text{ロシア} \end{array} \right] \rightarrow \text{イラン} \rightarrow \left[\begin{array}{c} \rightarrow \text{アフガニスタン} \\ \rightarrow \text{東方諸国} \end{array} \right]$
パール	アラビア → $\left[\begin{array}{c} \text{イラン} \\ \text{(ペルシア湾)} \end{array} \right] \rightarrow \left[\begin{array}{c} \rightarrow \text{ロシア, 東方諸国} \\ \rightarrow \text{インド} \end{array} \right]$
宝石	ヨーロッパ → $\left[\begin{array}{c} \text{ } \\ \text{トルコ} \end{array} \right] \rightarrow \text{イラン} \rightarrow \text{アフガニスタン}$

(2) 19世紀第1四半期におけるペルシア湾貿易の性格

19世紀初頭を特徴づけるイランの貿易構造は、以上にみたように18世紀型貿易構造をそのまま引き継いでいると見てよいだろう。つまり17世紀に栄えたヨーロッパ、とくにオランダとの生糸輸出を軸としたインド洋経由の貿易は、18世紀に入るとイラン国内の政治的分権化によって衰退し、インド、トルコ、ロシアなど近隣諸国との特産品交易が相対的に比重を高めた。この時代の輸入品は主として都市の需要に応じた奢侈品から綿布に至る消費物資それに手工業原料であり、イランからの輸出もまた各種織物などの都市手工業品が多くそれに各種の農産物からなつた。貿易の規模も比較的小さかつた。したがって19世紀初頭には貿易そのものがイランの社会や産業構造の変容に大きなインパクトを与えるということとはなかつたといつてよい。こうした特徴をもつ貿易構造はほぼ1820年代まで続いたと考えられる。

公的な貿易統計は19世紀前半には存在しない。ただイギリス人によって限られた年次において推計が試みられている。フレイザーは1820年頃のイランの輸出は中継貿易分を除いて122.5ポンドと推計している¹⁷⁾。当時貿易収支が均衡していたから純貿易はおよそ250万ポンドとなる。またトラブゾンのイギリス領事の推計によると、1830年のイランの輸入額は200万ポンドであつた¹⁸⁾。いずれも信憑性に欠けるが、1800年頃の純貿易額が130万ポンド程度であつたから、19世紀の第1四半期にほぼ倍増したことになる。

この時代、貿易ルートはイラン南部のペルシア湾を経由するルートが次第に重きをなした。ペルシア湾にはブーシェールとバンドルアッバースの2つの主要な貿易港があるが、1805年にここを経由した貿易は輸入が20万ポンド、輸出が30万ポンドであつた¹⁹⁾。その後の輸入の変化をブーシェールだけで見ると、1817年には22万ポンドとまだほとんど増えていない。しかし1830年には75万ポンドに達し、1820年代に急増したことがわかる。ルート別の構成をみても、19

世紀初頭と比べてペルシア湾のシェアが大幅に拡大している。

ブーシェール・ルート	……………75万ポンド	
トラブゾン・ルート	……………35万ポンド	
ロシア	……………60万ポンド	
その他	……………30万ポンド	20)

第1四半期にペルシア湾貿易が拡大した理由としては、第一にナポレオン戦争以降中東をめぐる西欧列強の勢力圏が塗り替えられたことが大きい。インド洋におけるイギリスの覇権が確立され、ペルシア湾の安定化がはかられたことがここで貿易増に影響した。ペルシア湾を経由する貿易は、主としてインドおよびインド経由の貿易であり、イギリスの東インド会社との取引が活発化し、ブーシェール港にはイギリス船舶の入港が頻繁化した。第二には、カジャール朝の地方支配の強化によってイラン国内の安定化が進んだことがあげられる。とくに内陸の交易ルートの危険度が低下したことが大きい。

しかしペルシア湾貿易の発展も、その主役は、19世紀前半期には、インド人、アラビア人、ペルシア人によるダウ船であったといつてよい。1823年、ブーシェール港における輸入額67万ポンドのうち65%に当る43.6万ポンド分はダウ船から陸揚げされた²¹⁾。ダウ船交易は、インド洋の西は東アフリカから東はジャワ方面にまで及び、インドとその東方の産品の多くはダウ船でイランに運ばれた。ペルシア湾経由によるイランを輸入をみると、少なくとも19世紀の最初の四半期の通してインドおよび東方産品の占める割合が圧倒的に大きい。表4はブーシェールで陸揚げされた輸入品をヨーロッパとアジアの産品に分けて示してあるが、ヨーロッパ商品は全体の4分の1程度を占めていたにすぎない。ダウ船による貿易は、統計に現われない密貿易の占める割合が高かったと想定されるから、アジアの産品の実際のシェアはこの数値よりかなり大きいと考えられる。すなわち1820年代のペルシア湾貿易の発展は、1830年頃までは対西欧貿易以上にインド、中国などの東方との貿易の拡大に多く依存し、イランの貿

表4 ブーシェール経由の輸入

(£1,000)

	インド、中国 製品	ヨーロッパ 製品	計	ヨーロッパ製品の シェア (%)
1817	178	42	220	19.1
1818	189	51	240	21.1
1819	274	92	366	25.1
1820	422	26	448	5.8
1821	155	111	266	41.7
1822	444	139	583	23.8
1823	505	164	669	24.5

(出所) Willock to Canning, 7 July 1824, in EHI, pp. 90, 91

易構造はまだ19世紀初頭と比べて大きな相違をみなかったといってよい。

したがって、織物等工業製品の輸入でみると、イギリスを中心とした西欧の製品は、1820年代まではまだイランにとって重要な位置を占めていたとはいえない。ヨーロッパの毛織物は、イランの地場の織物を価格や品質の上で圧倒することはなく、輸入額もこれと競合する程には大きくなかった。織物以外のヨーロッパ製品は時計やガラス製品などがあるが、それらは奢侈品的性格をもった。比較的大衆消費的であったのはむしろインド綿布であり、イラン国内で高い需要があった。

3. 対イギリス貿易の発展と貿易構造の変化

(1) トラブゾン・ルートの開設とイギリス綿布、生糸の貿易

イランの貿易構造は、ヨーロッパとの貿易に限ってみると、1820年代までは大きな変化はなかった。イランの社会経済構造は、貿易自体によって強い変容のインパクトを受けることはなかったといってよい。しかし、1830年以降にな

ると貿易構造は徐々に変化がみられ始める。貿易額は1830年以降も増加傾向が続き、1857年には600万ポンドに達した。この額は1830年頃と比べるとほぼ2倍に相当する²²⁾。中継貿易が次第にその比重を低下させたことを考慮すると、純貿易では伸び率はより高かったと考えてよい。この時代の貿易構造の変化はおよそ次のような特徴をもった。

第一に、貿易の主要な対象地域が変化したことである。この時期の貿易額の増加はもっぱら対イギリス貿易の発展の結果により、インドおよびロシア貿易はそのシェアを相対的に低下させた。ダウ船貿易も、したがって比重を低下させた。

第二に、貿易の主要品目に変化がみられたことである。輸入品としては、とくにイギリス製綿織物が急増した。イギリス産業革命の完了によって、工場制機械工業による安価なイギリス綿製品が大量にイランに流入がはじめた。

第三には、生糸輸出の急増である。17世紀に発展した生糸輸出は、18世紀に入って衰退したが、ヨーロッパに向けて再び輸出を伸ばし始めた。主産地であるギーラン地方の生産量をみると、18世紀中頃は163トン程度にすぎず、19世紀に入ってからもその伸びはゆるやかで1822年には381トンであった。しかしその後急増して1836年には815トンに達し、国内自給分を除いたほとんどがヨーロッパに輸出された²³⁾。すなわち、1830年を前後して貿易の地域別構成と貿易品目に顕著な変化がみられたのである。

この貿易構造の変化は、主要貿易ルートの移行を伴って展開した。1820年代は19世紀におけるペルシア湾貿易の最初の発展期に当たるが、30年代に入ると、主役は再びペルシア湾からイラン北西部のルートに移る。しかし、これはかつてのルートと異なり、タブリーズからトラブゾンを經由してヨーロッパにつながるルートではある。トラブゾンは、図1にみるようにトルコのアナトリア北東部の黒海に面した港町である。トルコを經由して地中海に出る対ヨーロッパ貿易の従来ルートは、イラン北西部の都市タブリーズから陸路アナトリアを

縦断してイスタンブルやイズミールの商業貿易のセンターに至り、ここから海路マルセイユなどヨーロッパの港につながっていた。これに対してトラブゾン・ルートは、タブリーズからエルズルムを経て陸路トラブゾンに向い、この港から黒海をとってイスタンブルに至り、さらに地中海を経てヨーロッパにつながった。この新ルートは1820年代に開かれたが、1830年代に入ってから大きく発展をみる。これにはロシアとの貿易を嫌ってイギリスとの貿易拡大を期待し、内陸路における治安の維持と交通の便宜をはかったタブリーズ知事アップラス・ミルザーの功績が大きかったといわれている²⁴⁾。彼はロンドンの大商人と貿易取引関係を結び、トラブゾンへの商船の就航をうながし、イスタンブルを中継する貿易ルートを開設した²⁵⁾。このルートが発展したさらに一つの理由としては、イギリスとの貿易において輸送コストがペルシア湾経由よりも低く、また輸送の日数が短いことがある。

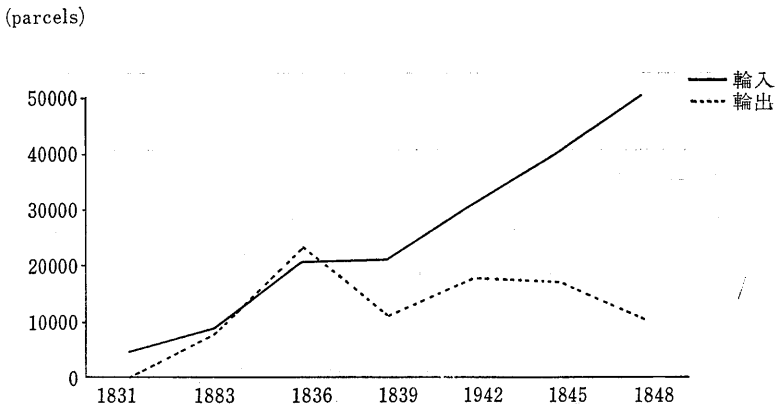
イランの政治および経済社会の中心は北部および中部地方にある。つまりタブリーズとマシハッドとイスファハンを結ぶ三角形の内部が外国製品の主要な消費地でありまた輸出商品の生産地でもあった。ペルシア湾ルートを利用する場合、このイランの中心からブーシェールなどペルシア湾の港まで陸路1,000 km程をキャラバンで行き、海路はここからアラビア半島をまわり紅海をスエズの南で上陸して地中海に出るか、希望岬をまわるかのいずれかの経路をとった。ペルシア湾のブーシェールと黒海のトラブゾンの2つの港からテヘランまでの陸路輸送日数を今世紀初頭の資料で比較すると、ブーシェールーテヘランが65日、トラブゾンータブリーズーテヘランが70日である。道路が未整備であり荷車などが利用できず、ラバ、ロバまたラクダの背荷物として運ばなければならなかったため、輸送コストはいずれのルートもかなり高くついた。荷物1 kg当たりの陸路輸送費を比較すると前者が18.1シリング、後者が18.6シリングである²⁶⁾。陸路輸送だけをみるとこの2ルートはコスト的には目立った差がない。しかし、各港から西欧までの海上輸送のコストと日数を比較するとトラ

トラブゾン・ルートが圧倒的に有利であった。

トラブゾンに入港した商船はルート開設時には帆船であった。しかし1836年に最初の蒸気船があらわれ、1840年代末には定期便が就航月に6回トラブゾンにやってきた²⁷⁾。その後1860年代初めまでトラブゾン経由の貿易はイランの貿易に占める比重を確実に高め、ペルシア湾ルートを圧倒した。19世紀中頃には、イランの輸入総額に占めるトラブゾン経由の割合はほぼ50%に達している。

図2は、1830、40年代にトラブゾンを経由した貿易量の推移を示したものである。この間、貿易量は4倍近くのびている。しかし、輸出が停滞的であるのに対して輸入の伸びが著しく、1848年には輸入額は輸出額の5倍に及び貿易バランスは悪化傾向をたどった。この輸入超過は、主としてヨーロッパとくにイギリス製品の輸入が増大したことによる。つまりトラブゾンルートの繁栄は対イギリス貿易の発展の結果であったといつてよい。

図2 トラブゾン経由の貿易推移



(出所) Godel, R., Ueber den pontischen Handelsweg und die Verhältnisse des europäischen Verkehrs, 1849, in EHI, p. 102 より作成

トラブゾン貿易における際立った貿易収支の赤字は、イランから金の流出を激化させた。金の流出はただトラブゾンにおける貿易だけが原因ではない。当時のアフガニスタンの辺境での戦争も影響している。イギリスとの政治的関係の悪化もともなって、貿易による金流出はイラン政府の不满としたところであり、この状況に対して、イギリス領事は、イランの生糸の製糸技術の改良の可能性をさぐり、品質の面でより優れヨーロッパの生糸市場に受容される生糸を生産し、イランからの輸出を増やす必要があると、提言している²⁸⁾。

イラン北西部の都市タブリーズは、トラブゾン・ルート²⁹⁾の貿易とアゼルバイジャン経由のロシア貿易とのイラン国内の拠点となったが、この地を経由した貿易品の輸出入額を示したのが表5である。輸入は1837年以降は1850年代末までにほぼ倍増している。すでに1830年代前半の段階で輸入は急増しており、1830年頃を基準にすると6倍程度に増加したと推定される。タブリーズの輸入品の構成をみると、8割以上をイギリスの工業製品が占めた。1830年以降タブリーズは商業都市として発展するが、この契機となったのが生糸の輸出とともにこのイギリスから綿製品の輸入であった。

表5 タブリーズ経由の貿易

(£ 10,000)

	輸入額 a	英製品の 輸入額 b	b/a (%)	輸出額	絹、生糸 の輸出額
1837	98.5	60.0	60.9	10.5	
1839	59.2	45.0	76.0	46.4	21.4
1844	70.3	56.2	79.9	36.9	13.1
1848	83.1	77.2	92.9	34.4	14.4
1850	88.2	76.2	86.4	60.7	23.6
1858	163.9	136.8	83.5	97.5	38.9
1859	178.6	151.8	85.0	96.5	41.0
1863	146.0	81.5	55.8	53.4	35.1
1864	180.0	157.5	87.5	60.0	50.2

(出所) Jones, G., *tabriz, 1873*, pp. 364-371, in EHI, p. 114

タブリーズ貿易に関して、輸入の相手国とそのシェアをさらに詳しくみると、1848年時点で輸入額83.1万ポンドのうち、77.2万ポンド（93%）までがイギリスによって占められ、残りはドイツが3.3ポンド、ロシアとフランスがそれぞれ1.2万ポンドであり、イギリスの独占状態にあった。イギリスからの輸入品目はその92%までが綿織物であった²⁹⁾。

一方、タブリーズからの輸出は、1850年代に増加し、60年代にはいと減少している。輸出相手国の構成をみると輸入国とは対照的である。1848年でみると輸出はその55%までがロシア向けであり、ヨーロッパとトルコへは45%の15.4万ポンドと半分を割っている。ロシア向け輸出にはかなりの割合でヨーロッパ製品の再輸出が含まれているが、詳細は不明である。タブリーズは北西ルート³⁰⁾の貿易都市として繁栄するが、地中海、トルコを経由する対ヨーロッパ中継貿易の拠点でもあったのである。

タブリーズからの輸出は、生糸が主であり、生糸輸出は1840年代に入り順調に伸び、60年代前半には輸出の8割を占めるに至った。中継貿易による再輸出分を除いた純輸出では、数字で示すことはできないが、この期間生糸が輸出の圧倒的に高いシェアを占めたと想定される。すなわち少なくとも1860年代前半までの期間では、タブリーズ貿易は綿織物を中心とするイギリス製品の輸入と生糸輸出という構造を明確に示していた。1860年代に入ると生糸輸出が増えるのに、輸出総額としては減少する傾向を示すが、これは後に示すようにロシア国内のコーカサス・ルートの開設でロシアへの再輸出が減少した結果による。

イランの貿易構造は、以上みたように1830年代に入って徐々に変容し、40年代以降構造的変化を明確に示しはじめた。トラブゾン・ルートは、対ヨーロッパ貿易のルートといてよい程にヨーロッパ貿易の占める比重が高かった。この点で従来のトルコ内陸経由、また1830年代までのペルシア湾ルートと異なる様相を示していた。産業革命を経過してイギリス産業資本が確立しマンチェス

ターの綿織物が世界商品として世界市場を拡大していく時代に、イランもまたその市場化の過程をたどり、輸入は1830年以降にまずトラブゾン経由の貿易を通して展開したわけである。この変化は、その後北部イランを中心にイラン社会経済に影響を及ぼすことになるが、19世紀前半はまだその過渡的な時代といっ
てよい。一方ペルシア湾経由の貿易は、対ヨーロッパ貿易の停滞でインドを中心としたアジア貿易、周辺地域との地域間の特産品貿易の特徴をなお強く残していた。

(2) 19世紀中期の貿易統計

19世紀前半期のイランの貿易については、資料的に制約が大きく、貿易額としては、タブリーズなど若干の貿易拠点における数字があるだけで、イラン全体の貿易額については大雑把な推計があるにすぎなかった。この時代、密貿易がかなりあったと考えられるがその実態は不明である。例えば、1840年代にペルシア人、アルメニア人、またトルキスタンのブハラやヒバの人々がわずかな商品をトルコに運び、ヨーロッパ製品と交換している。またイランの北西部やロシアのチフリスから小商人がショールやパールなどの宝石をイスタンブールに運んでいるが、この内容や貿易全体に占める比重も明らかではない³⁰⁾。

19世紀半ばになるとようやくイラン全域を対象とした貿易統計があらわれ、貿易構造の特徴はより明確になる。表7はイラン各地の貿易拠点における1850年を前後した数年間の統計を平均値で示したものである。当時、統計に含まれない密貿易が盛んであったという条件付ではあるが、最初の信頼度の高い貿易統計として価値がある。

貿易額では、1850年頃には1830年頃と比べほぼ2倍に伸びている。貿易品目をみると、輸入は綿製品、絹製品、羊毛製品のいわゆる繊維製品の割合が大きく、全体の63%に及ぶ。繊維製品の中でもとくに綿製品のシェアが高く繊維製品の65%に達している。表5にみたように、トラブゾン・ルートを経由する

綿製品はほとんどがイギリス製であった。ペルシア湾ルートではインド綿布の輸入が続いていたが、トラブゾン・ルートの発展でイラン市場におけるシェアは大幅に低下し、マンチェスター製の機械製綿織物にとって代られた。

繊維以外では茶が8.4%と多い。19世紀中頃に茶を飲む習慣が都市でかなり大衆化したことによる。砂糖の輸入も同様である。当時イラン国内では茶と砂糖はほとんど生産されておらず、需要の増加で輸入はその後さらに増えた³¹⁾。いずれも国内生産が本格化するのには20世紀に入ってからである。その他の輸入は農産品、趣向品など多様性に富むが額としては小さい。これらはロシア南部、インドの隣接地域やアジアからの輸入であり、いわゆる地域の特産品の輸入という性格をもっている。

イランからの輸出は、輸入同様に繊維製品が多く、27%を占めている。生糸と合わせると58%となる。しかし、これにはかなりの再輸出が含まれている。イランの織りものは19世紀半ばには輸出力をかなり弱めていた。とくに綿織物はイギリス製品に圧倒されて、都市の綿工業は衰退過程を辿っていた。伝統工業としての絹織物工業もまた同様である。したがって、表6にみられる綿織物などの繊維製品の輸出のなかでイラン製品の占める割合は高くはなく、ヨーロッパの製品がイランを経由して第三国に輸出されたものが相当に含まれたのである。すなわち中継貿易が高い割合を占めた。このおもな再輸出先はロシアとトルキスタン地方である。また綿織物輸出の中には、イギリス製の白地の綿布がイラン国内で捺染され、加工がほどこされて輸出されたものもかなりあったようである³²⁾。

輸出項目としてあげられている茶、薬、染料も再輸出品である。これらはイランにとって輸入産品である。再輸出先は主としてロシアとトルコである。1823年にイラン・ロシア間で締結された不平等条約であるトルコマンチャイ条約では、貿易関税は相互に5%以下の低率に抑えられた。この低関税を利用してヨーロッパ製品はイランを経由して、イランの輸出品目にまぎれてロシアに

表6 1850年頃の主要な貿易品と貿易額

(£1,000)

	輸 出		輸 入	
	額	%	額	%
生糸	940	31.3		
絹製品	152	5.1	254	8.5
綿製品	335	11.2	1,228	41.0
羊毛製品	329	11.0	411	13.7
薬, 染料	63	2.1	187	6.3
茶	104	3.5	257	8.6
タバコ	111	3.7		
綿花	31	1.0		
穀物	316	10.5		
羊, 馬, 他	257	8.6		
乾燥果実, ブドウ	121	4.0		
砂糖			71	2.4
他	241		585	
計	3,000	100.0	2,993	100.0

(出所) Blau, O. *Commerzielle Zustände Persiens*, Berlin, 1858. in EHI, pp. 132~135

大量に輸出されたのである。19世紀半ば過ぎまで、トラブゾン経由の貿易とコーカサス経由のロシア貿易の拠点であったタブリーズは「長い間、ロシアのコーカサスへの再輸出貿易で栄えた」のである³³⁾。つまり、ロシア南部市場へのヨーロッパ製品の輸出には、イラン経由がコストの面で有利な条件にあったのである。またトルキスタン方面へは、タブリーズからテヘラン、さらにマシハッドを經由して再輸出された。イギリス人の領事アボットは、この時代「マシハッドからヨーロッパ製品のかなりの量がヒバヤブハラ的首都に向けて送られた。ここでの消費は毎年増加しているようである。」といている³⁴⁾。

繊維製品、茶、薬、染料を除くと、イランからの輸出はほぼイラン産品であったといってよい。19世紀中頃には、まだロシアに向けてイラン製の織物の輸

出がみられたが、主要な輸出品は農産品と半加工品である。うち最も額が大きいのが生糸であり、再輸出を除く純輸出では半分近くに達したと思われる。生糸は、とくにギーラン地方の製品がヨーロッパとロシア市場に向けて輸出を伸ばし、19世紀中期にピークに達している。

生糸以外では、穀物や羊、馬などの家畜の輸出が大きい。穀物はイラン北部で生産される米と南部の小麦であり、米は国境を越えてロシア南部に小麦はインドに送られた。家畜についても同様であり、農産品輸出はきわめて地域性の強いものであった。

以上、19世紀中頃になると、イランの貿易構造は工業製品の輸入と農産品およびその半加工品の輸出という特徴を強めるようになる。貿易対象は周辺諸国からヨーロッパに比重が移り、イギリスをはじめとする西欧からの機械制工業製品である織物が大量に流入し、インド綿布を駆逐するとともにイランの伝統的産業である織物工業を衰退させた。一方、輸出は生糸への特化が顕著にみられた。

4. 19世紀後期の貿易構造と伝統的手工業の衰退

(1) 対ロシア貿易の構造

イランの対ロシア貿易は、19世紀中期までは構造的にイギリスとの貿易とは異なる特徴をもっていた。イランーロシア間の貿易は、ようやく19世紀末になって分業的關係が明確化するものであり、それまでは相互の特産品交易という性格をもち続けていた。19世紀半ば以降、イランからの手工業製品の輸出は減少傾向を示した。イギリス綿布のロシア輸出が増え、イランの手工業が衰退過程をたどったことがその主たる原因としてある。しかしながらロシアへのイランの工業製品輸出は、1880年代はじめまでその隣接する地方に対して続いていた。

貿易バランスは終始イランの出超であった。

ロシアは国境を接する大国として、19世紀初頭のトルコマンチャイ条約以降南下政策を強化してイランに対する政治経済的影響力を強めてきた。この動きは1880年代になると帝国主義的進出を強めるイギリスと衝突し、イランはこの2国の角逐の場になった。トルコマンチャイ条約自体はロシアがイランの門戸開放を意図したものであり、イランは関税自主権を喪失し、イラン国内におけるロシア人の比較的自由的な商業活動が認められた。しかし商業、貿易関係に限ってみると、ロシアはこの条約を自国に有効に利用することができなかったといつてよい。少なくとも1880年代までは企図したイランへの商業的進出は成功していない。むしろ逆に工業製品はイランからロシアに流れ、またイランを経由してヨーロッパ商品が大量にロシアに流入した。ロシアのとくに南部市場において、ロシア製の工業製品と競合関係を持った点でマイナスに働いたといつてもよい。中継貿易を除く純貿易では、19世紀末まで終始ロシア南部とイラン北部の地域間貿易という特徴を強くもちつづけていた。したがって、トルコマンチャイ条約がイランのロシアへの従属化の契機になったとする理解は、経済、貿易に関するかぎり正しいとはいえない³⁵⁾。

この条約は、その後西欧諸国がイランと通商条約を締結するうえでの基準になった。1820, 30年代に同様の内容をもつ協定が、イランとイギリスまたその他の西欧諸国との間で結ばれている。むしろこの西欧との協定がイランに対して影響を大きくおぼしたといえる。つまり自由貿易をイランに押しつけることによって、西欧の産業資本の市場としてイランを開放させる制度的役割を果たしてきた。その後の貿易構造の変化についてはすでに述べた通りである。

表7, 8は、1844年と1870年のイランの対ロシア貿易を示したものである。いずれの時代もイランの出超であり、1844年には輸出は輸入の3.5倍に及んでいる。イランからの輸出をみると、綿・絹・毛織物のいわゆる繊維製品が圧倒的の比重を占めている。これはヨーロッパ製品の再輸出が相当に含まれることに

19世紀イランにおける貿易の展開と社会経済構造の変容 I

表7 ロシアへの輸出額

(1,000 ルーブル)

	1844年	1870年
綿製品	1,456	1,037
絹製品	510	264
毛織物(もうせん)	104	70
綿糸	62	51
絹布	181	88
綿花	19	844
乾燥果実, ナッツ	170	1,030
家畜	123	188
穀物		145
計	2,902	4,296

(出所) Entner, M., *op. cit.*, pp. 10~11

表8 ロシアからの輸入額

(1,000 ルーブル)

	1844年	1870年
鉄	169	227
銅	64	126
金属製品	49	107
生糸	136	31
綿布	11	225
絹製品	35	42
毛織物	13	366
リンネル, 麻	12	50
乾燥果実	24	219
パン原料	32	59
染料	18	92
計	819	1,669

(出所) Entner, M., *op. cit.*, pp. 10~11

よる。イラン産品がどの程度を占めていたかについては不明だが、1875～78年でみると平均で65万ルーブルの繊維製品の輸出があった³⁶⁾。繊維以外は主に農産品であり、輸出額は増加の傾向にある。品目では生糸が減少し、綿花と乾燥果実それに穀物が増加している。綿花輸出はロシアの綿工業の発展にともなうて19世紀末以降急増しており、イランの原料供給地化が進むが、その端緒が1870年頃にみられたのである。

イランの輸入をみると、1844年には鉄、銅の鉱物と繭が大きい。しかし、70年になると鉱物以外に繊維製品と乾燥果実が増えている。繊維製品は毛織物と綿布が大きい。毛織物はロシアの工業製品と考えてよい。19世紀後半のロシアの毛織物工業の発展によってイランからロシアへの輸出が逆転し、その流れが変わったことを示している。しかし、綿織物については当時の交易ルートの変化によるものでイギリス製品の逆流と考えられる。

表9 コーカサス経由でイランに入ったヨーロッパ製品の価額

(1,000ルーブル)

年次	輸入額	年次	輸入額
1862	71	1878	2,074
1863	35	1880	4,575
1865	1,540	1881	7,772
1870	1,810	1883	5,643
1874	3,692	1884	295
1876	3,899	1885	50

(出所) Entner, M., *op. cit.*, p. 22

黒海を経由する対ヨーロッパ貿易のルートに、1860年代中頃からほぼ20年間大きな変化がみられた。コーカサスにおける鉄道の開設と、1865年の中継貿易の自由化が契機となり、黒海の港ポティやバトゥームを経由するルートが開かれた。このルートはトラブゾン・ルートよりも貿易コストが低かったためヨーロッパ船舶は荷揚げ地をトラブゾンからコーカサスへ移し始めた。とくに1880

年代初めこのルートは著しく繁栄した。1881年にロシアの対イラン輸出は390万ルーブルであったのに対し、同年にコーカサス経由でイランに入ったヨーロッパ商品はその倍の780万ルーブルに及んだ³⁷⁾。つまりイランからロシアへの中継貿易の流れが逆転したのである。しかし、この期間は短く、1883年にロシア政府によってコーカサスが閉鎖されるとともに終止符が打たれた。この閉鎖はモスクワの綿工業資本家やウクライナの砂糖輸出業者などの要求によるもので、当時ロシア綿工業は、国内のロシア綿製品市場でようやくイギリスに対抗するだけの競争力を持ち始めていた。また砂糖はイランへの輸出が伸び始めていた時期でもあった³⁸⁾。この結果、北の門を閉ざされたヨーロッパ商品はペルシア湾に全面的に向かうことになったが、この点については後述する。

ロシア産業資本の確立の時期については、1860年の農奴解放の後に設定するか、1830年代以降の高い工業成長率からより早い時期とするかは論争のあるところである。しかしイランとの貿易構造を見る限り、1870年以降もしばらく変化はなかったといってよい。イランからロシアへの繊維製品の輸出は、1875～78年に65万ルーブル、1885～87年に至っても20万ルーブル弱であったのである。これにはいくつかの理由が考えられる。一つは、ロシアの国内市場が大きいためにイランに対するロシア製品の輸出圧力が小さかったこと、一つは、イランとモスクワなどの工業の中心地との実質的距離が非常に大きかったことがあげられる。モスクワとコーカサスおよびトルキスタン間の鉄道が敷設されるまで、陸路、家畜の背荷物としてまたカスピ海を経由するきわめてコストの高い経路に依存せざるをえなかった。ロシア工業化の展開に伴って、工業製品のロシアへの流入に対する抑制措置が1870年代末からとられ始める。先にあげたコーカサスの閉鎖もその一環であるが、1877年にはロシアは、関税率を50%まで高めた。また関税を金で支払うことが規定され、この規制措置によってヨーロッパ製品とともにイラン製品の輸出は強く圧迫されることになった。

貿易構造上の変化は1880年代から急速におこる。これはちょうどイギリス、

ロシアによる帝国主義的進出とイランの政治、経済的従属化が深化する時期にあたる。資本進出と利権獲得競争が開始され、ロシアは道路・鉄道の敷設、銀行、保険会社、運送会社、紡績会社、タバコ会社の設立を進め、イランへの債権国として政治、経済的支配力を強めた。国家に支持された商業的進出のプログラムも強力に実施にうつされた。

19世紀末におけるイラン-ロシア間の貿易については、統計が欠如しているため今世紀初頭の統計から推測せざるをえない。1870年と20世紀初頭を比べると、綿織物と綿花の貿易にきわだった変化がみられる。表10にみるように、イランの綿製品輸入は急激に伸びている。1909/10年ではイランの綿製品輸入全体の39%まではロシア製品が占めており、イギリスの独占状態にあったイラン市場へのロシアの食い込みの激しさがわかる。一方イランからの綿花輸出の伸びも大きく、1909/10年には輸出の97%までがロシア向けであった。ロシアの原綿消費量をみると、1865年から96年には平均で270万ブードにすぎなかったが1890年代前半になると1,000万ブードを越え、1910年代には2,300万ブードに達しており、イランに対する綿花需要もこの間に増大したことをものごとっている³⁹⁾。

表10 イランの対ロシア貿易 (10,000 ルーブル)

	綿製品輸入	綿花輸出
1844	1.1	1.9
1870	22.5	88.4
1909/10	876.7	1,222.4
1910/11	975.7	1,241.7
1912/13	1,664.2	

(出所) Entner, M., *op. cit.*, p. 10, 11, 65, 72 より作成

ロシア国内の主な綿花供給地はトルキスタン地方である。この地方は1860年代から70年代にかけてロシアに併合され、ロシア工業化の国内植民地として綿花モノカルチャー化した。この変化はカスピ海とタシケントを結ぶ鉄道敷設に

よる生産地と市場間の実質的距離の短縮で加速された⁴⁰⁾。

イランの綿花輸出もトルキスタンに隣接するイラン北部のゴルガンやマーザンデランからのものが多く、ロシアの産業構造と地域構造の変化によって、この地方の綿作地化が進んだことを示している。

19世紀末におけるイランのロシア向け輸出は、綿花以外にもそのほとんどを農産品が占め、とくに米、乾燥果実、原毛がのびた。米はカスピ海に沿った湿润なギーランとマーザンデラン地方が主産地である。その他に中南部イランでも生産されているが、輸出はそのほとんどがこの2つの地方からのものである。ギーランからの輸出は、1879年に6.5万ポンドにすぎなかったが、1892/93には23.4万ポンド、1904~1908年には50万ポンドまで増加した⁴¹⁾。

要するにイランの対ロシア貿易は、19世紀末になってようやく構造上の変化を示した。1830年代以降の対イギリス貿易を特徴づけた農産品輸出と工業製品輸入という構図が、イギリスと比べてほぼ半世紀遅れてロシアとの貿易においても明確化した。この時間的ずれは、ロシアの工業化の遅れによるものであり、ロシアのイランに対する帝国主義的支配と同時的に進行したのである。

(2) 1889年のイラン貿易統計

19世紀末になるとイランは英露2国の帝国主義的侵略の場になる。とくにロシアは北部イランに強い影響力を行使し、イランとの貿易を急速に拡大した。イギリスは南部イランにおいて権益を維持したが、貿易では徐々にその比重を低下させた。しかしながら19世紀の間はイギリスはなお貿易における高いシェアを保ちつづけていた。

貿易統計としては、1889年にカーズンが試算したものが残されている。(表11) この統計は、関税収入と関税率から各品目別に算出したものであり、実態を正確に表した数字とはいえないが、おおよその傾向をつかむことは可能である。

表11 1889年におけるイランの貿易

(£ 1,000)

輸 入			輸 出			
		%			%	
綿製品	1,840	英 1,700 露 140	47.2	綿織物	3	0.1
絹, 毛織物	570	英 510 蘭 29		毛織物	14	0.7
		仏 14	14.6	カーベット	84	4.1
		露 14		ショール	10	0.5
布地	43	蘭 29 露 14	1.1	生糸	384	18.3
金属製品	30		0.8	アヘン	540	25.7
ガラス製品	110		2.8	綿花	140	6.7
砂糖	310		7.9	タバコ	90	4.3
茶, コーヒー	70		1.8	穀物 米	290	16.7
インディゴ	43		1.1	〃 小麦	60	
香料	290		7.4	乾燥果実	180	8.6
鉄	47		1.2	家畜, 皮革	40	1.9
他	547		14.0	香料	60	2.9
				葉, 染料	120	5.7
				他	80	3.8
計	3,900		100.0	計	2,100	100.0

(出所) Curzen, G., *op. cit.*, II, p. 559

イランの輸入は、63%までが繊維製品であり、うち4分の3までを綿製品が占めた。この繊維製品の輸入総額に対する割合は1850年と変わらない。しかし、1850年には再輸出がかなり含まれており、純輸入額では30年間にほぼ2倍に増えた計算になる。繊維製品を輸入国別でみると、1889年にはイギリスのシェアがまだ圧倒的に大きい。しかしロシアからの綿製品輸入は、表10にみるように1909/10年にはイラン綿製品輸入総額の39%にまで拡大し、19世紀末からイギリスとロシアの2国がイラン市場を2分する形で展開するのである。

イランからの輸出をみるとそのほとんどは農産品である。主要品目はケシ、穀物(おもに米)、生糸、乾燥果実、綿花であり、6品目で輸出全体の80%を占

めている。農産品輸出はこの後も増加の傾向にある。また1850年統計と比べて相違点の1つとして、イランからの繊維製品の輸出の減少があげられる。1850年には輸出の27%を絹、綿、羊毛の製品が占めていたが、1889年にはこれがほとんど消えている。この理由としては、イラン産織物の周辺諸国への輸出の減少とともに再輸出の消滅があげられる。再輸出は19世紀末になるとほとんどなくなるが、その理由はロシアにおける工業化の進展がある。ロシア綿織物はロシア国内市場への進出をはかりイギリスからの輸入製品と競合したが、1883年のコーカサスの閉鎖でこれをロシア南部から閉め出したのである。またトルキスタンは1860年代から70年代にかけてロシアに併合され、ここからもイギリス製品は閉め出された。

綿布などの織物に代ってカーペット輸出があらわれた。カーペットはいわゆる高級なペルシアン・カーペットであり、ヨーロッパ、ロシアにおいて好まれ、特産品として輸出をのばしはじめた品目である。カーペット生産には1875年頃からヨーロッパ商人による資本進出がみられる。アラクなど各地にカーペット工場が設立された。カーペット輸出の拡大は、イラン人商人やヨーロッパ人商人によるカーペット生産への商業的支配を強めた⁴²⁾。

(3) ペルシア湾貿易の発展と貿易構造

1830年以降、イギリスの対イラン貿易ルートとして栄えたトラブゾン・ルートは1860年代に入ると次第に衰退の過程をたどり、19世紀末にはその重要性を全く失う。イラン北西部の別のルートとしては、既に述べたようにコーカサス・ルートが1890年代はじめまでの一時期繁栄したが、これもロシア政府によるコーカサス閉鎖とともに終止符がうたれた。その後、イギリス貿易はペルシア湾に移った。1870年代の末にペルシア湾貿易は急増し、1890年代に入るとさらに発展する。1889年におけるペルシア湾とトラブゾンの貿易額を比較すると、前者が輸入173万ポンドであったのに対して、トラブゾンは輸入57万ポンド、

表12 ブーシェールに入港した各国の船舶数とトン数
(1897, 98, 99年の平均)

	帆 船		蒸 気 船	
	船 数	トン数	船 数	トン数
イギリス	28	2,740	96	104,892
トルコ	62	3,483	1	1,794
ペルシア	173	5,567		
マスカット	12	1,363		
アラブ	52	2,245		

(出所) Report on the Administration of the Persian Gulf Political Residency 1899/1900, p. 59

輸出4万ポンドでありイギリス貿易におけるシェアを縮小している。

ペルシア湾のブーシェールに入港した船舶のトン数の推移からもペルシア湾貿易の発展がわかる。1873年の5.1万トンから1895年には19.0万トンへと3.7倍に増加している。またこの年の船舶の国籍ではイギリスがトン数で91%を占め、ダウ船は急減した⁴³⁾。蒸気船の来航頻度でみると、1870年にはボンベイから月1隻、イギリスからは年間3,4隻であったのが、19世紀末になると定期便が毎週また2週に1回の割で就航した⁴⁴⁾。

イギリスの主要貿易ルートがペルシア湾に移った背景としては、イランをめぐるイギリスとロシアの角逐があり、イラン北部に対するロシア帝国主義の政治、経済的な影響力の増大がある。そしてコーカサス閉鎖はその一契機をなした。しかし一方で、1860年代以降の海上輸送の条件の変化をも無視できない。この条件の変化は、第一に、1869年のスエズ運河の開通である。従来ヨーロッパとインド洋を結ぶルートは、アフリカの南端を経由するか、地中海から陸路を紅海に出てそこから再び海路によるかのいずれかであったのであり、スエズ運河の開通は輸送日数の短縮とコストの面で大幅な減少が可能となった。第二に、1840年代以降、帆船にかわって蒸気船が登場し輸送量とスピードを徐々に増したことである。つまり、この条件の変化はトラブゾン・ルートと比べてペ

ロシア湾ルートに有利に作用したのである。

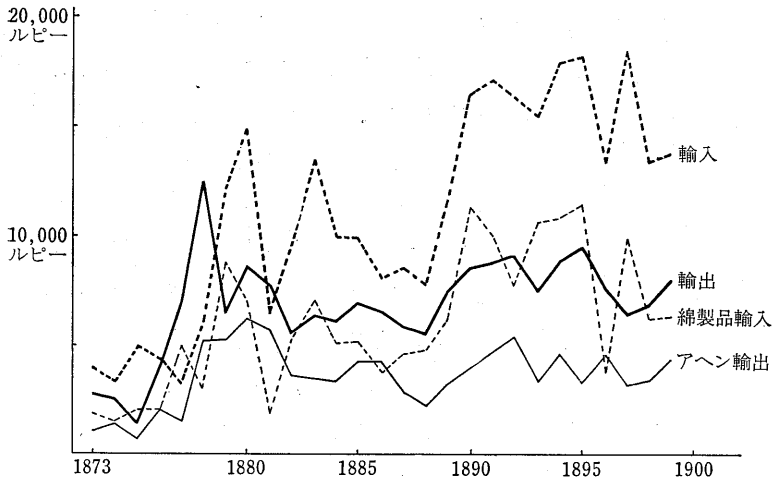
この海上輸送の条件の変化は、またヨーロッパの対アジア貿易において画期的なできごとであった。ヨーロッパ資本主義諸国にとってアジア市場の拡大および政治、軍事的影響力の強化の条件を与え、アジア植民地支配の意義を大きく変化させた。イギリスにとってはインド洋はそれ以前と比べてはるかに重要性を高めた。ペルシア湾へのルート変更はイギリスにとっての地勢上からくる戦略的な意味も含まれていたと考えられるのである。

ペルシア湾貿易自体はトラブゾン・ルートの繁栄期にも続いていた。とくにインド洋を経由するアジア地域との貿易ではペルシア湾が唯一のルートであり、インドやその東方からはインディゴ、砂糖、茶の農産品、銅などの鉱物が輸入され、イランからは綿花、アヘン、家畜、生糸、毛織物が輸出された。イギリスの綿製品もトラブゾン・ルートと比べて輸入額としては小さいが、ペルシア湾からの輸入のほぼ半分を占めていた。

しかし、このペルシア湾ルートの発展は、北部ルートの貿易商品を南に移しただけでなく、イランとイギリスをめぐる貿易構造にも大きく影響を与えた。図3は、1870年以降のペルシア湾貿易の推移を示したものである。趨勢としては1870年代後半と1890年代前半に段階的に急増期があったことがわかる。貿易品目としては綿製品とアヘンが圧倒的に高い割合を示し、いずれも輸出入額の50%前後を占めている。この2品目の貿易量の増加がペルシア湾貿易の総量をひきあげる形となっている。

アヘンは中国とイギリスに向けて輸出された。1874年にはブーシェールとバシラップスからの輸出額162.4万ルピーのうち70%が中国、30%がイギリス向けであった。しかし、アヘン輸出が急増する1870年代末からは、そのほとんどが中国に向けられ、1879年にはそのシェアが98%に及んでいる。アヘン輸出の実態については後に述べるが、これはイランとイギリスの貿易構造を特徴づけるものである。イランの対イギリス貿易は終始イランの入超であった

図3 19世紀後半のブーシェールの貿易



(出所) Report on the Administration of the Bushire Residency の各年次の統計表より作成

が、綿織物の輸入増加の過程で貿易赤字は拡大されたこの貿易の不均衡を是正する役割をアヘン輸出が担った。

当時、イギリスとインドの間においても同様の貿易構造が形成されていた。つまりイギリスの綿製品の輸出に対するインドの貿易赤字は、インドから中国へのアヘンの輸出でバランスがはかられた。一方イギリスは中国から茶、絹を輸入し、いわゆる三角貿易が成立していた。イランとイギリスのペルシア湾貿易は、この三角貿易の一端にイランを組み込む形で形成されたのである。

イランからのアヘン輸出の増加はイギリスのイラン貿易の主要ルートがペルシア湾に移って後の現象であり、イランの貿易構造はロシアとの間では、綿織物の輸入と綿花、食料の輸出がロシアの工業発展にともなうロシア国内の地域間分業にイランが組み込まれる形で展開したのに対して、イギリスとの間はイ

ギリスを中心とした世界貿易の枠組みへの包摂の形で展開したのである。綿製品、アヘン以外の貿易品としては、輸入は砂糖、茶の輸入増がめだつ。これは紅茶をのむ習慣がイランの各階層、また農村にまで及んだことを示している。砂糖はフランス植民地とインド、茶はインドと中国からの輸入であり、この発展はイランの商品経済の進展を象徴する事象とみてよいだろう。

輸出は、アヘンを除くと穀物、カーペット、タバコがある。カーペットは1880年代に入って輸出を伸ばしており、多くはイギリス向けである。その他は農産品でいずれもインドとイギリス向けはインドを経由するものと、直接イギリスに向けて輸出されるものがあるために、その割合は不明である。

(4) ヨーロッパの工業製品の流入と伝統的工業の衰退

19世紀のイランの都市の商業および手工業活動について、とくにその前半期には断片的にしか知ることはできない。過去の繁栄した時代と比べるとその規模は小さかったといわれており、例えばイスファハンはサファヴィー朝の時代には人口が70万に達したといわれている⁴⁵⁾。18世紀の政治的な不安定な時代に商業、手工業ともに衰退したことで都市もまた衰退した。しかしイスラム都市一般にみられる構造を備え、すでに述べた地域間貿易に応じた機能をもっていたのである。

19世紀におけるイランの都市人口については趨勢は不明であるが、少なくとも手工業都市ではヨーロッパとの貿易の発展期に減少している。手工業の最も盛んであったイスファハンは19世紀初頭に30万の人口を抱えていたが19世紀中期には5万にまで減少している⁴⁶⁾。この人口減少には、部族の侵入や飢饉が一つの契機になったことは確かである⁴⁷⁾。しかしながらまた手工業の衰退が大きく影響したことも確かである。貿易構造の変化、とりわけイギリスを中心としたヨーロッパの繊維製品の流入はイランの産業構造に大きく影響を及ぼし、伝統的工業を衰退に導き、都市人口の減少を加速したのである。手工業都市のマ

ニューファクチャーや家内工業の主な製品であった織物は、国内の諸都市とその周辺に市場をもち、また周辺諸国へ輸出されていたが、イギリス製綿織物を中心とした繊維製品の輸入の増大はこの伝統的なイランの手工業と競合し、次第にイランの都市市場を席卷しはじめ、外国市場でも競合してイラン製品は輸出力を弱めていった。

絹織物はイランの伝統的な手工業品であったが、この時期に生産をかなり縮小している。主産地であったイスファハンでは、絹織物工場は、ファタリー・シャー期（在位1797～1834年）に1,250あったといわれている。しかし、次のモハンマド・シャー期（在位1834～1848年）以降衰退の過程をたどり、この在位期には工場数460、そして1850年代には240、さらに1870年代後半にはわずか12に激減した⁴⁸⁾。ヤズドもまた絹織物工場が多く、周辺では養蚕が盛んであった。19世紀半ばには1,800の工場で9,000人が絹織物工業に従事していた。しかし、その後急速に衰退した。1860年代半ばに蚕菌病が蔓延し、これを契機に養蚕業が衰退したことがこれに拍車をかけた⁴⁹⁾。

綿製品もまたイランの伝統的の手工業品であり、イスファハンのカダク（青地の手織り綿布）の主産地で、国内における消費の他にかなりの量が主としてロシアに輸出されていた。しかし、イギリス製綿布の輸入はこの綿布生産も縮小させた。イラン市場におけるイギリス製綿布の価格はイスファハン製手織り綿布の2分の1から3分の1であったといわれ、低廉な輸入綿布に圧倒されて1870年代から80年代にかけイスファハンのカダク織職人はかつての5分の1以下に減少したといわれている⁵⁰⁾。

この繊維製品の輸入増と都市の織物工業の衰退は、イラン国内市場における輸入織物のシェアを急速に高め、とくに都市とその周辺では手織りの製品はその消費を急速に減らしイギリス製品にとって代られた。19世紀末になるとこの傾向は顕著にすすんだ。1980年代のはじめにカーズンは、イスファハンの都市におけるイギリス製品の氾濫ぶりについて次のように述べている。「ラクダ

やロバで運ばれてくる商品の荷は10のうち9までがイギリスの商標のついたものであり、この様子をみるとイギリス人として大いに満足させられる。聞くところによると、マンチェスター製がイスファハンのほぼすべての衣料店で扱われているという。』⁵¹⁾

こうした手工業都市の衰退と対照的に、ヨーロッパとの貿易の発展によって貿易の拠点となった都市は繁栄し人口を増大させた。例えばトラブゾン・ルートの発展によってその中心都市となったタブリーズは、イラン各地から商人が集り、外国の仲介商人の貿易事務所が開設され、人口は1865年頃に11万を数えるまでに成長した⁵²⁾。タブリーズはイギリスの綿織物の輸入と生糸輸出のセンターであったことからこの地の商人は外国貿易の発展によって富を蓄積し手工業者と異なる利害関係にあったのである。貿易に関連する商業部門の発展はタブリーズに限らずイランの各都市にみられ、商業的蓄積の一部は、後に検討する同じくヨーロッパ貿易の発展によって成立した商業的農業に向けられ、新たな地主制の発展に一定の役割を果たすことになった。

ヨーロッパとの貿易の発展はイランの産業構造に大きく影響を及ぼし手工業を衰退させたと同時に手工業都市の衰退をも招いた。そしてこの変化は時期的には19世紀前半に始まり1870年頃にはほぼ完了した。しかし19世紀中期に都市の産業およびその社会構成を変容させたいわゆるヨーロッパのインパクトが農村社会にまで及んだかという点、少なくとも19世紀中期にはその影響は小さかったといえる。これは都市の手工業製品の国内市場には従来農村は含まれていなかったことと関連がある。イランの都市人口は19世紀には人口総数の20%程度であったといわれている。都市とこの周辺地域がこの都市工業の市場であり、農村は内部における手工業によって比較的農村地域における自給的経済が存在していたと想定されるのである。フレイザーは、1838年にイラン北部の農村を見聞しているが、この村では村人すべてが村で生産された衣類を身に着けていた。かれらは綿花を植えてまた養蚕のために少しの桑を植えた。綿花は村

の人々によって紡がれ粗い布に織られ、様々な衣類に加工された。生糸との混紡糸はより念入りに縞柄の布に仕上げられ、その一部は他地域に運ばれ、売られたり交換されたりした⁵³⁾。当時はこうした村は決して特殊ではなく、農村における織物工業は主に自給を目的にイランの農村に広く存在していたと考えられ、また農村地域間の交換がおこなわれた。すなわち19世紀半ばには、農村ではまだ地場の製品が優位を占め、農家の家内工業が健在であり、都市の手工業製品の流入は限られていたといつてよい。都市と農村の経済的関係は、租税、地代として農村の余剰が都市に集積され、これが都市の経済的基礎を成したという点に集約されていた。もっとも地域性も大きく早くから養蚕が盛んであったギーラン地方や都市に野菜などを供給していた都市周辺農村ではこの限りではない。しかしここでも農産物の商品化は主に地主によっておこなわれることが多かった。したがって都市の工業製品に代替的に普及した輸入製品は、都市工業の伝統的な市場にまず流入したのであり、農村への流入はその時期がかなり遅れた。

19世紀中期までの農村社会および商品経済化の程度については、その実態を明らかにする資料は著しく乏しい。アブラハミアンは19世紀前半のイラン農村を、村落は個別に自治的な社会組織をもち相互に交渉をもたない小宇宙的な共同体として描いた。各村は手工業を家内副業また村抱え的な職人によって村落の内部的分業関係を形成し自給的であり、村落間の関係も希薄であったとする。そしてこの根拠をイランの自然に求めた。つまり乾燥、半乾燥の地理的地形的な自然環境また遊牧民の存在が農村の共同体を分断し、さらに共同体が厳しい自然条件の中で生き生産を高めることは他の共同体の死を意味する関係が存在したという。この自然決定論理解ではイランの農村社会は商品経済が極度に発達していなかったことになる。

しかしこれはマルクス、エンゲルスのアジア社会論の借用で実証の欠落した論理であり、当時の村落をアウトルキー社会と規定することは無理がある。ま

ず村は決して個別分散的でも対立的でもなかった。村落は灌漑条件等農業の適地に集中して立地しており、これは今日の村落分布からも容易にわかる。また早魃時に水論を引き起こすことがあっても水利を共同で利用する社会で水役人を選出し、水利慣行による調整システムが存在したのであり、地域社会が成立していたと考えられるのである⁵⁴⁾。また19世紀前半の農村は19世紀後半と比べて豊かであったというのが通説となっている。フレイザーは当時の村の生活について、住居は心地良く小奇麗で、食事には小麦のケーキ、ヨーグルト、チーズそれに時々肉が用意され、衣類は粗いが十分に着ており、賃金率も高かったと記しているものであり⁵⁵⁾、村落間にゼロ・サム的關係はなかったといっている。村の規模は一般に小さく村落内で完結した分業は不可能である。今世紀の半ばにおける農村地域構造の類推でいえば、村落の間に比較的規模の大きい大村があり、村落内で完結しえない分業関係がこの間に存在した。例えば鍛冶、綿布や絨毯の染色、小麦の製粉などはこの大村の店舗で営まれた。すなわち大村を中心とした分業と交換が存在したと考えられるのである。

ヨーロッパの工業製品はこの都市の市場圏から相対的に自立化した農村地帯にスムーズには入り込めなかったのである。しかし、19世紀末になると都市とその周辺に限られていた輸入綿布の市場は農村部にまで拡大し、農民も輸入綿布を身に着けるようになる。カーズンはこの様子を次のように述べている。「男も女も、また支配層から土地の耕作者に至るまであらゆる階層が数多くの種類の衣類を着た。絹製品、サテン、ブロードは上流階級に不可欠な贅沢品であり、プリント、シャツ地や綿布はすべての人々が身に着けた。最も貧しい農民層もマンチェスターやモスクワ産のものを着た。」⁵⁶⁾この時代に至って農村で自給用に生産された織物は輸入品に代りはじめ、農村の織物工業も都市の工業に遅れて衰退の過程を辿ることになった。

地域内分業をもつと想定される農村社会にヨーロッパの工業製品が如何なるプロセスで流入したか。都市を中心とした市場圏に位置する都市周辺の農村地

域とその外側では明らかに相違があった。カーズンの記した19世紀末の状況が辺境の村落にもみられたかについても疑問がある。

都市周辺では都市と農村の分業関係は従来から存在した。都市では野菜や果物などの農産物の市が開かれたし、肉などの畜産物も周辺村落から供給された。また19世紀後半に織物などの伝統工業が衰退過程をたどった後も農村市場を対象とした都市の手工業は影響を受けなかった。イスファハンの場合、1870年頃手工業の衰退の中で犁、鋤、つるはし、手押車の農具生産の手工業は生き続け、鍛冶屋、農民や遊牧民の身に着ける帽子、綿製の靴の職人は活躍した⁵⁷⁾。また1870年代の飢饉の後には、「数年前から綿作は復活し農民は競って作付けをした。彼らは以前（飢饉の時）売り払った銅を再び買い戻しはじめ、これによって銅細工師は活気を取り戻した。」⁵⁸⁾のである。

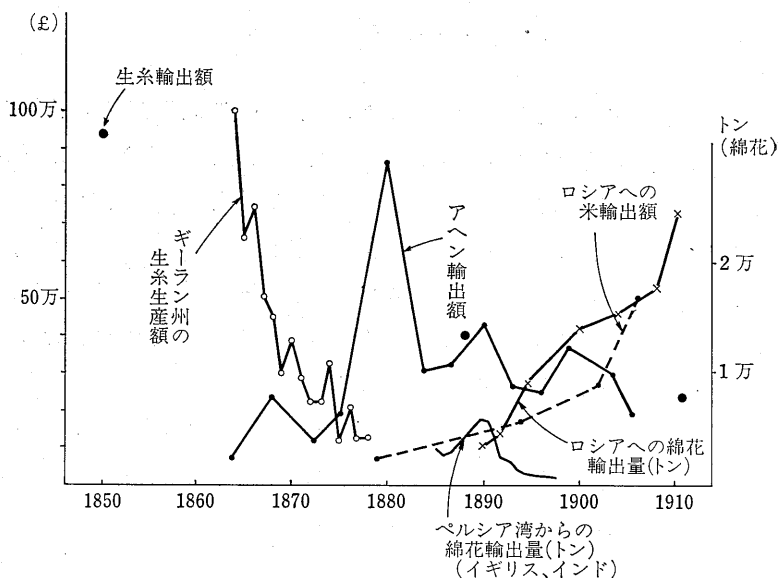
しかし都市市場圏から外れた農村地域とくに辺境村では、商品経済の発展が遅れたために都市の手工業品や輸入工業製品の流入はかなり遅れた。ここでの商品経済化は輸出作物の導入が契機となったといつてよい。生糸を除くと輸出作物の生産は19世紀中期以降に発展をみるが、この時期に農村に外部から工業製品が商人の手を経て大量に流入を始めたのである。ただ輸出作物もイランの農業地帯にあまねく広がった訳ではない。半乾燥地の天水農業地帯では自然条件がその作付けを不可能としていたし、辺境でも交通条件等で普及しなかった。したがって農村地域内の分業関係はさらに後まで続いたと考えられるのである。

5. 輸出作物生産の発展

これまで19世紀の全過程にわたってイランの貿易構造の変容とその特質について限られた資料をもとに検討してきたが、農産物に限ってみると先進資本主義国イギリスと後進資本主義国ロシアに対する輸出拡大という特徴をもっていた。すなわち国際分業化の進展の中で一次産品特化というアジア諸国が共通に辿ってきた過程をイランもまた辿ったのである。ヨーロッパからの地理的關係でみればイランは地中海東部のオスマントルコのさらに東に位置し他方でインド洋に面し、ロシアとの関係ではその南に隣接しており、地政学上の位置からイギリス、ロシアの政治経済的な戦略に大きく影響をうけてきた。したがって輸出農産品もまたこの影響を受けてきた。つまりイギリスにとってはインド貿易程の重要性はなかったとはいえイランはインド洋の重要な戦略的位置にあり、アヘン輸出を通してイギリスを中心とした中国、インドのいわゆる三角貿易に組み込まれることになったし、またロシアとの関係ではその南下政策の圧力を終始受けておりロシア資本主義に周辺として編成されたロシア南部地域との関係で工業原料および食料の供給地として綿花、米の輸出を拡大した。すなわちイランは19世紀世界の枠組の中でそのおかれた地理的条件に規定を受けながら世界経済の歴史的な展開過程に対応する輸出構造を辿ってきたのである。輸出の拡大期は作物で異なり、ヨーロッパ市場に輸出された生糸が1860年代まで主役の座を占めていた。1870年以降になるとアヘン、次いで80年代から綿花、米が徐々に輸出を伸ばした。この動向は図4にみるとおりである。

一方この貿易によって農業社会は外部市場と直接的に結びつきイランの農業社会は次第に変質し内部的構造、生産の諸関係を変容させてきた。農村は伝統的な内部自給型市場経済を解体させ、商業的農業を成立させて商業的地主制を発展させた。

図4 イランからの主な輸出農産品の輸出動向



- (出所) ロシアへの米輸出額は, Issawi, C., EHI. p. 243; アヘン輸出額は, Seyf, A., Commercialization of Agriculture (Journal of Middle East Studies No. 16, 1984) p. 246; ギーランの生糸生産額は Curzen, *op. cit.*, Vol. I, p. 267; ロシアへの棉花輸出量は, Entner, M., *op. cit.*, p. 73; ペルシア湾からの棉花輸出量は, Report on the Administration of the Bushire Residency から作成, 生糸輸出額は, Blau, E., Commerzielle Zustände Persiens, in EHI, pp. 132~135, Curzen, N., *op. cit.*, Vol. II, pp. 559~61
- (注) 生糸生産はギーラン州がイラン公体の8割ほどを占め, 多くが輸出されており, また米はそのほとんどがロシアに向けて輸出された。

19世紀初頭までの農産物輸出をみるとインドを含めた周辺部を輸出対象とし近隣地域間の交易という特徴をもった。輸出品目は小麦, 乾燥果実, たばこであり輸出額も19世紀中期以降と比べてはるかに小さい。輸出自体偶然的であり, たとえばインドとの穀物貿易をみると輸出の方向は早魃や豊作により流れが変化したのである。貿易商人は地域間の需給の変動に敏感に反応して農産物を船に積み込んだ。つまり農産物貿易は地域の不足を補う余剰の輸出という性格をもっていた。この余剰の商品化は農民自身の手による部分は少なぐほとんどは

余剰の収奪者である地主や支配者が取得したものの商品化であったと考えられる。

国内の農産物市場は主として都市である。農村では農家がほぼ自給していた。綿花は都市の綿織物工業，農村の手工業の原料としてイラン全域で生産され，都市での消費分は商品化された。穀物などの食料も余剰が都市にはこぼれ商品化された。しかしこの都市で消費された農産物は主として地代や租税の収奪者の手によって商品化されたものといってよく，農民による商品化は厳しい収奪機構の存在と都市の市場圏と農村の市場圏の相互関係が希薄であったことによってきわめて部分的であり農村地域内部に限定されていた。つまりこの時代の農産物商品化は農村社会の商品経済化の展開を証明するものではない。農産物に対する国外需要の拡大によって商品作物生産が発展した後もこの構造は基本的に大きく変わっていない。輸出作物の商品化は地主によって担われた。農産物に対する外国市場が開け農業が高い収益性をもつことが明らかになると旧来の地主は輸出作物の生産を農民に強要し地主による農産物の商品化が開始されることになった。都市の商人や官僚層もまた高収益によって地主化を進め輸出作物生産に熱をいれた。つまり農産物は主として地主によって商品化され，農民は輸出作物生産者として直接的に市場と向き合うことはなかった。この過程における変化は輸出作物生産の発展と封建的土地所有者としての地主に商業的性格を付与した点において顕著に進行したのであり，農民社会は地主制の変容によって経営の主体性を弱め共同体を弱体化したが商業的農業の展開の担い手になったわけではなかった。

しかし輸出作物生産の発展が農村の商品経済化に一定の影響を与えたことも事実である。自給用の作物から商品作物への作付け転換は自給経済を崩すことになり商品部分の比重を高めざるをえないのであり貨幣経済を不可避とした。これは19世紀後半に農民からの税の徴収が物納から金納へと変わったことや19世紀末に農村をイギリス製衣類が席卷していたことから知りえるのである。

19世紀における輸出作物生産の発展は以上のようにイランの農業社会の経済構造に大きな影響を与えた。この点については別稿で詳述する予定にしており、ここでは主として輸出作物生産の発展の過程をたどる。

(1) 生糸

19世紀に最初に輸出を拡大した農産品は生糸である。輸出額は1820年代に入ってから増加の傾向を示し始め、60年代前半にピークに達した。19世紀を特徴づける輸出農産物であるケン、綿それに乾燥果実と米が輸出を伸ばすのが1860年代後半以降であるから、19世紀中期までは、生糸がイランにおける唯一の主要な輸出農産品であったといつてよい。

イランでは養蚕の歴史は古い。生糸は、17世紀にはサファヴィー朝の特産品として大量にヨーロッパ、とくにオランダに輸出され、その収入は地税とともに国家財政の主要部分をなした。サファヴィー朝の崩壊後は、国内の政治的分権化と社会的混乱によって、18世紀の一時期ロシア向け輸出を増やしたものの、ヨーロッパへの輸出は大幅に減少した。しかし、生糸は輸出産品であると同時にイラン国内の都市や農村部における絹織物工業の原料として国内市場に供給され、生産は18世紀を通して継続しており、この養蚕の伝統があって19世紀に入ってイランの貿易構造が変容する過程で、生糸が最初に輸出産品として重要な位置を占めることができたのである。

1830年代に入ると、イギリスの綿製品が徐々にイラン市場に流入をはじめますが、生糸はこの輸入の増加と平行に輸出を拡大した。カージャール朝の宮廷の浪費や戦争の出費に加えイギリス綿製品の輸入増によって、金の国外流出が進み、貿易赤字の拡大で財政危機がひきおこされた。これに対して、政府は国内的には農民からの余剰の収奪を強めたが、また貿易赤字を補う形での輸出の拡大を策した。イギリスもイランに対して綿製品をはじめとする工業製品の輸出増加のためにイランからの輸入拡大を期待した。ヨーロッパ市場における

生糸需要と国内における生産基盤の存在によって生糸はイランの唯一輸出能力をもった商品として19世紀前半に輸出を伸ばしたのである。

1850年頃のイラン貿易については既に3章でその特徴を明らかにしたが、生糸は輸出の31%を占めていた。中継貿易を除いた純輸出総額では半分近くを生糸が占めたと想定される。とくにヨーロッパ向けでは生糸は輸出可能なほとんど唯一の産品であったといつてよい。

生糸の生産は地域性が強い。主産地はカスピ海沿岸のギーラン地方で、ここでイランの総生産の8割を占めた。カスピ海沿いの地方は気候が湿潤で他地方と比べて養蚕に適した自然環境にある。輸出生糸はそのほとんどがこのギーラン製で占められた。ギーラン地方以外の生産地としては北イランのアゼルバイジャン、ホラーサン、マーザンデラン、中部イランのヤズドがあげられるが、これら地方の生産地は農業生産の条件および立地条件から地域的にはきわめて限定され、生産された生糸の多くは国内の絹織物工業の原料として消費され、輸出は少なかったようである。例えばヤズドには、19世紀半ばに1,800の工場がありおよそ9,000人が絹織物工業に従事していたが、養蚕農家は都市周辺の灌漑農業地帯集中的に分布し生糸はほとんどこの工場に供給された。絹織物工業はヤズドの他にカーシャン、イスファハン、マシハッド、ダブリーズの都市にみられ、カーシャンでは1840年代に400の織機があったといわれている⁵⁹⁾。この都市工業に各地の生糸が供給された。輸出に向けられた生糸はそのほとんどがギーラン製であったといつて間違いはない。すでに述べたようにイランの絹織物工業は19世紀中期頃から衰退過程をたどるが、この時期に生糸の国内市場は縮小し輸出商品としての性格を強めた。

表13は、18、19世紀における主産地ギーランの生糸の生産量推移を示したものである。各年次の数字は、いずれも推計で信憑性は高くないが、おおよその推勢をつかむことはできる。1845～63年の約20年間は空白になっているが、50年代は蚕の微粒子病の流行でヨーロッパの生産が縮小した時期にあたりイラン

表13 ギーランの生糸生産

(1,000 kg)

年次	生産量	年次	生産量
1744	163	1865	557
1822	381	1866	613
1836	815	1867	503
1839	530	1868	403
1840	653	1869	324
1843	589	1870	418
1844	453	1871	350
		1872	287
1864	992	1873	347

(注) 1836年はマーザンデランを含む

(出所) Curzen, G., *op. cit.*, I, p. 347

生糸に対する国外の需要が増加し輸出はかなり増えたと想定されるのであり、1860年代はじめまでの時期は生糸生産の発展期と考えてよい。つまり19世紀中期までの輸出の発展はヨーロッパ市場における需要の拡大にあったのであり、生糸の価格は高位に推移した。ギーラン地方の生糸価格をみると、1850年代から60年代前半にかけてかなりの高水準にあった。(表14)

国外市場の拡大に対して国内市場は絹織物工業の衰退によってむしろ縮小の

表14 ギーラン地方における生糸価格の推移

(フラン/kg)

年次	価格	年次	価格
1840	20~32	1871	12.5~25
1857	40~50(中質)	1872	14
1864/65	50	1878	13
1865/66	65~70	1905	33~42
1866/67	19	1909	約40(中質)

(出所) Lafont, F. & Rabino, H., *L'industrie sericole en Perse*, Montpellier, 1910, pp. 28~30, 44, 48~50, in EHI, pp. 235~238

方向にあった。1860年代はじめの資料には、絹織物工業の衰退は、生糸の輸出価格が上昇したために生糸が輸出に向けられ国内に出まわらなくなったことに原因があると記されている⁶⁰⁾。生糸価格の上昇による原料不足が国内の絹織物工業を圧迫したことはおそらく事実であったと思われる。しかし長期的にみると、綿織物と同様にヨーロッパの機械製製品に対して国際市場および国内市場において競争力を低下させたことが絹織物工業の衰退原因であったといつてよい。国内市場における外国製品のシェアが高まり、外国製綿布の流入による消費者の趣向の変化も加わり、表6にみるようにすでに1850年には絹織物は輸入が輸出を凌駕した。すなわち絹織物工業の衰退によって国内市場を狭めた生糸は輸出商品としての性格を次第に強めることになった。

表5には、タブリーズを經由してヨーロッパやロシアに輸出された生糸の輸出額推移が示されているが、50年代に入りかなり急増している。1864年には、40年代の4倍近い50万ポンドが輸出された。このイランの生糸輸出に対してイギリスは強い関心を示している。1850年頃にイギリスの公使は「生糸はペルシアの最大の産品である。とくに重要な貿易品であり、これが外国からの輸入の一部に対する支払を可能としている」とのべており⁶¹⁾、綿製品の輸出を拡大する手段としての生糸輸入がイギリスにとって重要な問題であったと考えられる。イランの貿易収支の赤字拡大はイランへの工業製品輸出を停滞させる可能性がありこれを回避する必要があった。表5から明らかなように、トラブゾン経由の貿易はイランの圧倒的な輸入超過で、1848年には輸入は輸出の5倍に相当した。貿易拡大はイランからの金の流出を激化させ、イラン政府は、貿易バランスの悪化に対して1830、40年代の一時期イランからの金貨、銀貨の国外流出を抑える政策をとっている⁶²⁾。つまり輸入規制がとられた訳である。これが長期的に実効的であったかは不明だが、イギリスにとっては貿易不均衡による輸出停滞を避けるために生糸輸出を拡大する必要があった。後に述べるように生糸輸出が減少する1860年代後半以降はアヘンがこれに代る産品として輸出を拡

大しイギリスは積極的に関与することになる。

しかし、当時イランの生糸は質が悪く、ヨーロッパでは評判が良くなかった。繰糸は養蚕農家での工程でおこなわれ糸の太さは不均一でこぶがあり、また糸のかせが長すぎたのである⁶³。手工業であるイランの絹織物工業にとってこれは問題にならないが、ヨーロッパの機械織機による生産には適さなかった。イギリス人の報告書には、イランの農民は保守的で輸出に適した生糸を作る質向上の熱意を示さないという不満がしばしば述べられている⁶⁴。19世紀末の資料によると商人の養蚕農家からの買付けが生糸から繭にかわっている。商人は蚕卵を農民に貸付けて繭を手にした⁶⁵。これは繰糸工程が農民から商人に移ったことを示している。この変化は19世紀後半に徐々に起こったと推定される。しかし少なくとも19世紀中期の輸出はこの「質の悪い」生糸であり、輸出が増加した原因はもっぱらヨーロッパにおける蚕の微粒子病の蔓延にともなう価格騰貴と生糸需給の逼迫という状況にあった。1850年代には生糸とともに蚕卵がヨーロッパで不足し、その一部がイラン産で補われている⁶⁶。

イギリスはイランの生糸輸出に熱心であったが、実際の貿易業務においてはギリシア人やアルメニア人などの仲介的な貿易商人の果たした役割が大きい。仲介商人の存在は19世紀の国際分業化の展開する時代における中東各地の特徴をなしており、ヨーロッパの中東に対する経済進出の一媒介項をなした。タブリーズに設立されたイギリスの貿易会社も、その従業員はギリシア人やアルメニア人が多かったといわれており⁶⁷、19世紀後半のアヘン貿易が主としてイラン商人によって担われたのと対照的であった。生糸輸出の拠点となったタブリーズでは、とくにイスタンブルやイズミールに拠点を置く商人の活躍が大きく、トラブゾン・ルートの開設に伴うヨーロッパとイランの貿易の拡大によって1830年以降タブリーズに支店を開き、ヨーロッパ製品の輸入と生糸輸出に従事した。ドラブゾン貿易は1860年代はじめに外国人商人扱いの産品は全体の50%を越えていた⁶⁸。ギリシア商人のタブリーズ進出について、1840年にアボット

は次のように述べている。「1837年までこの国にはギリシアの企業は存在しなかった。ギリシアや他のヨーロッパの商人は、コンスタンチノーブルにいて、ペルシア商人によってこの都市に運ばれた商品の取引をおこなってきた。しかし、ペルシア商人のなかにはヨーロッパの商人に借金をしているものがいたためにギリシア人のいくつかの商企業がつぶれるという危機が生じた。ペルシアの商人はより安全にコンスタンチノーブルと交易をする用意がなかったために、ギリシア人のなかに交易をより直接的におこない、また商品の消費者により近づくために自らこの国に代理店を設立することを決めたものがあらわれた。」⁶⁹⁾すなわち、このような状況の中でトラブゾン・ルートの開設でイランのヨーロッパ貿易が繁栄したことを動機として、ギリシア商人やヨーロッパ商人のタブリーズ進出が始まったのである。外国人商人は、ヨーロッパ製品と生糸の貿易に従事したが、タブリーズを根拠地として生糸貿易に重要な役割を果たしたものとしてギリシア人の経営する Ralli & Co. 会社がある。この会社はイスタンブルを拠点としてヨーロッパとイランの中継貿易に従事してきたが、1837年に至りタブリーズに支店を開設した。Ralli & Co. 会社の一つの事業は、タブリーズ―トラブゾン・ルートを經由するイギリス綿製品のイランへの輸出である。しかしこの仲介商人の一つの特徴は、単なる貿易の仲介だけでなくイラン人やアルメニア人商人を系列下におき、イラン市場への販売網の形成に努めた点にある。

またもう一つの事業は生糸の輸出にあるが、仲介商人はこの商人の系列を通して前貸しの方法で養蚕農家や地主から生糸の買い付けを行った。すなわちアルメニア人やイラン人の中小商人に買付資金や蚕卵を供給し、中小商人はさらにギーランの地主や農民に経営資金や蚕卵を貸し付けた。アルメニア人商人には、地主や農民に蚕卵や資金を供給し、生糸を買い上げることが認められていた⁷⁰⁾。地主はこれをさらに農民に供給した。アボットによると、前貸制度によって生産された生糸は、商人と地主と農民の間で3等分され、この制度は、地主にとっては農業経営資金の提供に身銭を切る必要がなく、また農民にも資金

を金貸しに頼らずにすんだことで歓迎された。また商人にとっては農民に上質の蚕卵を供給し、生産の過程で技術および経営持導を行うことができた点で、生糸の質を高めることができる利点があった。微粒子病の蔓延時には、健康な蚕卵の貸し付けが商人の手で行われた。結果はうまく行かなかったが日本の蚕卵紙を輸入し、農民に貸し付けることも試みられた⁷¹⁾。19世紀中期にはその「質が悪さ」で評判が悪かったイランの生糸は、この制度によって19世紀末になるとヨーロッパ市場では上質なものとして扱われるようになった。

この間品質の改良があった訳であり、これは商人による養蚕農家の把握の結果、生糸の買い付けから繭の買い付けへの転換で繰糸工程が商人の手に移されたことが大きく影響した。つまりギーランの養蚕農家は、商人資本の系列を通して経営資金と技術の供給をうけることで商業的に支配を受けることになったのである。

以上、イランの養蚕業は外国人商人主導によって発展したといってよく、生糸輸出の拡大は、他方でイギリス製品の輸入増を可能とした。トラブゾン・ルートの発展は、このプロセスを通してイランをイギリスを軸とした貿易構造に巻き込み、国際分業構造にイランを農業国として包摂する過程として位置づけることができる。

しかし、1864年にピークに達したイランの生糸生産は、この年を境にして急減する。1860年代半ば以降のイランの生糸生産は次のように推移している。

1864年	1,200トン	
1865～73年	平均 350トン	
1874年	744トン	
1880年代	150トン	72)

1864年に1,200トンあった生産が、1865～73年には平均350トン、80年代には150トンにまで減少する。生産の最初の減少は、イランにおける蚕の微粒子病の蔓延をその契機としている。1850年代半ばにヨーロッパに始まったこの病気の流

行が10年の間を経過してイランに達し、1865年には生糸生産量は前年の44%まで低下した⁷³⁾。この流行は70年代の初めまで各地で続き、蚕卵が不足したためトルコや日本から輸入が試みられたが成功していない。蚕の微粒子病の蔓延は養蚕地帯にかなりの混乱を引き起こし、農家の所得を低下させた。農家は桑から他の作物への作付け転換を進め、ギーランでは小麦や米への転作、ヤズドではケシへの転作が進んだ。

しかし、生糸の生産は各地における病気の流行がおさまった後も回復していない。1880年代になると生産の減少はさらに進み、輸出はそれ以上に激しい減少をみた。この期の減少は、生糸の輸出価格の暴落に原因がある。表14はギーラン地方の生糸価格の推移を示したものだが、微粒子病が流行していた1866/67年に早くも価格の下落がみられその後低価格時代が続いた。1860年代前半に1kg当たり1ポンド前後であったイラン生糸の輸出価格は、1890年代にはその4分の1まで下落した。価格下落の原因は、ヨーロッパ市場における供給増にあり、ヨーロッパにおける微粒子病の終息による生産の回復に加えて、中国や日本製の輸出の急増が大きく影響した。他の商品作物に対する養蚕の優位性は全く失われ、19世紀末までの期間生糸生産は回復しなかった。

すなわち、19世紀中期まで対ヨーロッパ貿易における主要なイランの輸出産品は生糸であり、綿製品の輸入とこの生糸の輸出が貿易構造を特徴づけた。生糸はイギリスの綿製品輸出攻勢の前で大量に輸出可能な唯一の産品であったのである。しかし、微粒子病を契機に急速に生産は縮小し、価格の低下で長期に停滞化することになった。19世紀後期は対イギリスの貿易がトラブゾン経由からペルシア湾経由に移行した時期であり、イギリスーイランの貿易構造のなかで綿製品輸入に対するイランの輸出は生糸からアヘンに転換した。

(2) 米

19世紀中期までのイランの貿易はヨーロッパとくにイギリスとの関係で発展

し、この関係において構造的特徴を示した。つまりトラブゾン・ルートの開設後、イギリス製綿布の輸入とヨーロッパ市場への生糸輸出によってイランの貿易構造はイギリスを中心とした世界経済の枠組の中で変容の過程をたどった。一方対ロシア貿易は、この間北部イランとロシアの隣接する地域との間の特産品貿易という従来の性格と大きく変わるところがなかったといつてよい。しかし1880年代に入ると状況は変わり、ロシアは政治、経済両面でイラン進出を計り、この過程でとくにイランの北部はロシアとの間に分業関係を強めることになった。このロシアの進出と貿易構造の変化はロシアにおける資本主義発展を反映したものである。この資本主義国ロシアの進出によってイギリスは北部イランから後退を余儀なくされた。1882年のロシアによるコーカサスの閉鎖とイギリスの対イラン貿易拠点のペルシア湾への移行はこれを決定的なものとし、北部イランの貿易はこの過程でヨーロッパへの生糸輸出からロシア市場に向けた米と綿花輸出へと変化することになった。

北部イランへの米作の伝播ルートには不明な点が多いがインドから内陸を経由して伝わったというのが通説となっている。カスピ海沿岸は気候が湿潤で自然条件が米作に適したことで、この地方に定着したと考えられ、その歴史は古い。

19世紀に米作は2度の発展期を経験する。最初は養蚕業が低迷期を迎える1860年代後半から70年代にかけた時期、2度目はロシアへの輸出が拡大する1880年代から今世紀初頭にかけた時期である。養蚕業は前節で述べたように、1860年代後半に桑の微粒子病の流行と国際市場における生糸価格の長期低落によって影響を被った。農業生産における養蚕の優位性が失われ、主産地ギーランでは農業所得の減少による農家の貧困化が進み、養蚕業の危機への対応として他の商品作物への転作が進んだ。ギーラン地方は、生糸生産の伸張期には、農民の所得が他地方と比べてかなり高かったといわれている。養蚕の発展にともない商品経済が早期に展開し、作物特化も顕著に進んだのである。したがっ

て微粒子病の蔓延と生糸価格の下落は農家経済に深刻な影響を与えた。所得低下に伴ってギーランからロシアのコーカサスへ向けて大量の出稼ぎ現象がこの時期におこっており⁷⁴⁾、農民により作付転換が進められた。代替作物としてギーランの農業条件に適し価格の面で有利性をもっていたのは米である。1870年代の養蚕業の衰退期に米価はかなりの上昇を示した。1860年代末から72年までの数年間に3倍に高騰している。この原因はイランにおける飢饉にある。1870年代旱魃による飢饉が繰り返えされたが、とくに1870~72年の飢饉は人口の1割が餓死する厳しいもので、穀物やパンの価格は上昇し都市では暴動が頻発した。米価上昇は米への転作と開墾熱を引き起こし、「養蚕の繰返された失敗によって、ギーランの農民は森林を開いて米を植えるのに没頭している。』⁷⁵⁾という状況を呈したのである。この時代のギーラン地方の米作地の拡張の状況を、1872年にアボットは次のように記している。「米はギーラン地方では豊富でここ数年間に3倍に伸びている。養蚕の衰退が深刻化してからは人々は米作りを大々的に開始した。1865年に米の生産量は7万トンと見積もられている。しかし今日ではおそらく18万トン位にはなっているであろう。価格は1865年に1kg当たり1.3ペンスであったが、今日では4.4ペンスである。』⁷⁶⁾いわば米作のブームが1860年から70年代初めにかけてあったことを想起させるのである。飢饉が終息すると米価は飢饉以前の水準にまで戻った。米作地の拡大はこの時点で一段落し、米の生産量はその後若干の減少をみる⁷⁷⁾。

カスピ海沿岸地方の米がどこで消費されたかについては不明である。米作地帯の南はアルボルス山脈で地形的に遮断され道路も未整備であり、飢饉の前は生産量も少なかったことからそのほとんどが地域内で消費されたと考えられる。しかし飢饉時には米の増産によって余剰は食料不足状態にあった域外市場に搬出された。カスピ海沿岸地方は旱魃の影響が最も小さかった。国内の他地域への搬出とともにロシアへの輸出もみられる。しかし、ギーランからの輸出は1870年代に年平均2.5万ポンド程度でまだ小さい。これは生産額のほぼ5%に

相当する。つまり1860年代から70年代にかけての増産は、米価上昇を契機に国内市場への供給を目的としたものといってよい。

1880年代になると再び米作地の拡張が始まり、第二のブームを迎える。しかしこのブームは、米の国外市場が形成されたことが大きな契機となった点で第一期と異なる。新市場の形成は、飢餓終息後低落した米価を再び上昇させた。米の新たな市場はロシアであり、輸出はかなり急速に伸びた。1892/93年の輸出額は23.4万ポンドで、これは70年代のほぼ10倍である。さらに1904~08年には50万ポンドにまで達する⁷⁸⁾。この額は1879年におけるギーランの米の総生産額に匹敵する。また別の資料によるとイランからロシアへの米の輸出額は、1870年に14万ルーブルであったのが、1910年には526万ルーブルにまで増加した⁷⁹⁾。米の輸出増加に伴って水田開発がすすみ、イランの米は輸出作物としての性格を強めることになった。

ロシアへの米の輸出先はバクーを中心としたコーカサスとトルキスタンである。バクーは1879年に石油開発が成功して以来大量の労働者をロシアとイランから吸収した。このバクーの開発はイランからの米の需要を増加させ、カスピ海を經由してギーランからの米輸出を増大させた。トルキスタンはロシアの南下政策によって1860年代から80年代にかけて支配下におかれ、ロシアの綿工業に原料としての綿花を供給する国内植民地化した。綿工業の発展に伴って綿作地化を進め綿花モノカルチャー化を進展させたのである。これにカスピ海沿岸を拠点とする中央アジア鉄道の建設の果たした意義は大きく、1886年にはアムダリアまで1898年にはタンセントまで開通し、ロシア綿工業地帯と綿花供給地との実質的距離を縮めた⁸⁰⁾。イランのカスピ海沿岸地方は、ロシアのこの綿花に特化した国内植民地への米の供給地としての役割をも果たしたである。つまり19世紀末におけるイランの米作の発展は輸出を契機とし、資本主義の発展に伴うロシアの産業構造と地域構造の変化を伴うものであった。伝統的なロシアとの特産品貿易は19世紀末には構造的変化を生み、分業関係の展開の中で米の

輸出が位置づけられたのである。

(3) 綿花

綿花もまた19世紀後半期を特徴づける商品作物の一つであり、米と同様に1880年代に入ってからロシア市場の拡大に伴って輸出を伸ばした。エジプトやトルコの綿花市場が主にイギリスであったのに対して、イランの綿花は綿工業がイギリスより半世紀近く遅れて発展期を迎えたロシアへ輸出を拡大した関係で、輸出の伸張期がこれら2国よりも遅れることになった。イギリスへの輸出は時期的にはより早期に始まるが量的には小さく、1890年代初めに激減してその後復活しなかった。

19世紀の前半期はまだ綿花の輸出は盛んではなかった。表6にみるように1850年頃には輸出総額のわずか1%を占めたにすぎない。しかし綿花生産自体は、国内の綿織物工業の原料としてかなりの量が生産されていたと想定される。アボットが1850年代に南部イラン各地の農村の作付作物について記した記録によると、当時ほとんどの村で綿花の作付けがみられたのであり⁸¹⁾、またカーズンも「マーザンデラン、ホラーサン、セムナン、ゴム、カーシャン、イスファハン、それにアゼルバイジャンのホイヤウルミアの周辺が綿花の主な生産地である。しかし国内を旅行していると絶えず綿花の植えられた耕地に出会った」とのべている⁸²⁾。この綿花の消費は、一つは都市の綿織物工業である。イラン各地の都市にマニファクチャーや家内工業の形態で綿織物工業がみられ、都市とその周辺地域の市場に供給されさらに周辺諸国に輸出された。イスファハンはその主要な工業都市として繁栄しカダク織などの特産品はロシアや周辺諸国に輸出された。一方、農村には自給用綿布を生産する家内工業が存在した。つまり綿花は都市の綿工業の原料として商品として生産されたと同時に、農村の家内工業の原料として自給用に生産された。工業都市から遠く離れた地方の農村では、交通輸送の条件が著しく悪かったこの時代に量的にかさばる綿花は一

般に地域内部で消費されたと考えられる。いずれにせよ綿花は主として国内の綿工業の原料として栽培されていた。

1860年代前半、アメリカ合衆国の南北戦争でアメリカ綿の世界市場への供給が一時ストップした。これによってイギリスの綿工業は徹底した原料不足におちいり、原綿価格が高騰した。このいわゆる「綿花飢饉」の時にイギリスは中東綿花の輸入を増し、イランも一時輸出を伸ばしている。トラブゾン・ルートからの綿花輸出をみると、1857年にはわずか9トンにすぎなかったのが、1866年には1,200トンにまで増加している。ペルシア湾からボンベイ向けの輸出も、1844～45年には微々たるものであったが1863～64年には161万ルピー、1864～65年には679万ルピーに増えた⁸³⁾。しかし、1860年代の後半に、アメリカ合衆国の綿花生産が復活すると、価格は急落しイラン綿花にたいする需要は急減した。つまり19世紀の中期までは、綿花輸出は綿花飢饉の一時期を除くと活発ではなかったといえる。

19世紀後期になると、イランの綿花をめぐる内外の状況は大きく変化する。既に述べたように1830年代からはじまるイギリス綿布の大量流入は、イラン国内の綿工業に影響を与えた。まずイギリス綿布との競争に敗れた都市で綿工業の衰退が始まり、19世紀末になると輸入綿布が農村にまで入り込んだことで農村の綿工業も衰えはじめた。綿工業の衰退で綿花の国内需要が低下した結果、都市の綿工業や農村の家内工業に綿花を供給した地域の綿花生産は減少の過程をたどった⁸⁴⁾。しかし、一方では綿花の輸出は19世紀後半に伸びている。1880年代末の輸出額は14万ポンドでこれは1850年頃の5倍に相当する。輸出に占めるシェアでは7%にあたる。この頃には「毎年9,000トン以上がこの国を離れ、かなりの部分がボンベイのミルへ、そしていくらかがモスクワのミルへ運ばれた」のである⁵⁸⁾。イラン各地の綿工業の衰退は地場の綿花生産の衰退を引きおこしたが、これと対照的に、輸出を目的とした綿花生産に特化した主産地の形成が徐々に進みはじめた。

表15 ペルシア湾からの綿花輸出の推移

(1,000 ルピー)

年次	輸 出 額	インド	イギリス
1874	231	202	10
1877	1,443	1,310	133
1880	1,260	1,050	200
1884	988	987	0
1888	1,008		
1892	1,005		
1894	297		
1896	216		
1898	48		

(出所) Report on the Administration of the Persian Gulf Political Agency, Vol. 1~10

ペルシア湾からは主としてインド、イギリスに向けて輸出された。インドへの輸出分は一部はインドの綿織物工場で消費されたが、多くはボンベイからさらにイギリスへ運ばれた。1877年頃から多少の変動はあるが1893年頃まで増加傾向をたどっている。しかし、イギリスへの輸出は1895年頃から再び急速に低下している。イランの綿花は繰綿の不完全さや糸が切れやすいという品質の点でイギリスの織機に向かず、あまり評判が良くなかったようである。19世紀中頃、アボットは「イラン綿花は質が非常に劣り、生産地から黒海まで陸路長距離を輸送してイギリスに送るだけの価値がない」という内容の手紙を本国に送っている⁸⁶⁾。「イラン綿花は質が悪く繊維が短く切れやすい。各地でアメリカ種の導入が試みられたが、ほとんどの地方で住民の保守主義とさい疑心が起因して優良品種は普及していない。」といわれた⁸⁷⁾。また1891年のイギリスのペルシア湾の行政報告書には、イランの綿花は荷造りが悪く雑物を含んでよごれており、ロンドンやリバプール市場では評価が低いと記されている⁸⁸⁾。

このイギリス市場におけるイラン綿花の動向はエジプトの綿花と比べるときわめて対照的である。いうまでもなくイギリスの綿布生産は1830年代以降急成

長し、生産量は1819～21年に年平均8,000万ポンドであったのが、1844～46年には34,800万ポンド、1851～61年には65,100万ポンドに急増した。綿花輸入の伸びも大きく1821～25年の平均で38.6万バールであったのが、1856～60年の平均では236.8万バールへ6倍に増えた⁸⁹⁾。この需要に応じて、半植民地化し原綿供給地化したエジプトでは1824～30年に平均6,841トンであった輸出が、1851～60年の平均で22,763トン、1871～80年の平均では105,690トンに増加した⁹⁰⁾。エジプトはその後も順調に綿花輸出を伸ばし、綿花モノカルチャー化が進行してイギリスへの原綿供給地として農業部門の再編が進んだ。しかしイランは先に示した品質上の問題で、イギリスへの綿花輸出は大きく伸びることがなく19世紀末には急減した。これにはまたインドの綿花輸出の増加も影響している。インドはイギリスの植民地であったために、綿花の生産と流通に対してイギリスの直接的な持導や管理が可能で品質を高めることが出来たのであり、イラン産は競争にならなかったのである。

一方、ロシアへの綿花輸出はこれとは逆に1870年代以降順調に増加した。ロシア向け綿花輸出の推移をみると、1870年には27トンにすぎなかったが3年後の1873年には3,039トンに増え、1890年代はじめには9,475トン、さらに19世紀末には12,700トンに急上昇している⁹¹⁾。これはまた、イラン国内の綿花生産における地域的変動をもまねいた。1890年代初めのイラン各地の綿花輸出量をみると次のようであった。

	1890年	1891年	1892年
a ホラーサン	55.7	59.3	92.1
b 中・北部イラン	130.0	111.8	143.2
c アゼルバイジャン	15.0	6.4	7.5
d ブーシェール	89.3	48.2	35.7
e バンダルアッパース	29.3	14.3	11.8

(1,000ルーブル) ⁹²⁾

19世紀イランにおける貿易の展開と社会経済構造の変容 I

このうち a, b, c がほぼロシアへの輸出, d, e がインド, ヨーロッパへの輸出であり, 1890年にすでにロシアへの輸出がインド, ヨーロッパへの輸出を凌駕し, またロシアに隣接したホラーサンと中, 北部イランの輸出が増加傾向をしめしていることがわかる。この2年後の1894年には, ブーシェールとバンダルアップバスからの輸出は急減し, イランの綿花輸出はロシアの比重が圧倒的になった。ブーシェールからの綿花輸出の減少について, この年のペルシア湾行政報告をみると, ボンベイ向けの綿花輸出の割当を持ったイスファハン商人は, ロシアに有利な市場を見出したため, かなりの量の綿花をブーシェールでなくロシアに向けて送った, と記されている⁹³⁾。ロシアへの綿花輸出は, 今世紀に入るとさらに増え, 次のような動向を示した。

1901/02	398	1905/06	680
1902/03	443	1906/07	849
1903/04	353	1907/08	884
1904/05	139		

(1,000ポンド) 94)

ロシアは1870年代に産業革命を経過し, その後, 機械制工業による綿織物生産を本格化した。イランからロシアへの綿花輸出は, 丁度ロシア綿工業発展期に増大している。今世紀に入ると, ロシアに隣接したゴルガンやマーザンデランが綿花の主産地として発展するが, これはすでに述べたように中央アジア鉄道の敷設による立地条件の変化に伴うものであった。しかし輸出を目的にした綿花生産は, その後も綿花モノカルチャー化したエジプトのように全国的に広がった訳ではない。イランの綿花輸出量は, 今世紀初頭にエジプトの8分の1程度にすぎなかった。輸出がかなり伸びた1910年に至っても, 輸出量は2.5万トンで同年のエジプトの13分の1にすぎない。またロシア原綿のイランへの依存度も1910~13年の平均で6.5%であった⁹⁵⁾。

すなわち, 綿花はイランにとって19世紀後期に輸出農産品になり, 19世紀末

からはとくにロシア市場に向けて生産を活発化した作物である。輸出作物としての綿花の生産地は市場との距離的關係による地域性が大きく、その限りで主産地の農業社会に与えた影響は大きい。しかし、少なくとも1870年代から80年代にかけてケシが輸出作物として全国的に拡大したのと比べると、地域的でありイラン全体の農業経済に与えた影響は相対的に小さかったといつてよい。

(4) アヘン

綿花や米とともに、19世紀後半に輸出作物として生産を拡大したものにケシがある。ケシはアヘンの原料であり、加工品としてのアヘンが主にペルシア湾から中国とヨーロッパに向けて輸出された。綿花と米がロシアに向けて輸出を伸ばし、特産地が北部イランに形成されたのに対して、ケシは特産地が、中南部イランの各地に形成され、さらに北部イランにも広がったことで全国的な輸出作物となった。農業社会への影響もそれだけ大きかったといえる。

アヘンの生産は、11世紀末から12世紀初頭にかけてはじまったといわれている。サファヴィー朝時代には、王侯、貴族、文武の高官の趣向品として、また戦場に赴く兵士などの活力剤として使われた⁹⁶⁾。またカーズンによると、ヤズド地方では昔から現地消費向けにアヘンが生産され、これをジュースとしてたしなむ習慣があったという⁹⁷⁾。

イランからのアヘン輸出は18世紀に始まるとされている。しかし当時は、わずかな量が中国やインドに向けて断続的に輸出されていたにすぎない。19世紀に入ってからは、1824年に先駆的な商人によって30箱分がブーシェールからマカオに輸出され、1830年代にはブーシェールで外国人商人がアヘンを買いつけたことが記録されている。イギリスはイランのアヘンに関心があったようで、1840年にブーシェール駐在のイギリス領事は、南イランの農業開発に関連して輸出向けのタバコとケシの栽培を拡大することを提案している⁹⁸⁾。

輸出が急速に伸び始めるのは1860年代末に至ってからである。生産地はイラ

ン各地に拡大し、次第に全国的な輸出作物として発展を開始する。イスファハンでは、その地の大商人が1850年代前半にインドに渡りボンベイでケシ栽培とアヘンの精製法を学び、帰国してから普及に努めたことが契機であるといわれており、1859年にイスファハンから早くも4.2万ポンドのアヘンが輸出された⁹⁹⁾。

ケシ作は、1860年代の半ば頃から各地に普及し、70年代後半になると飛躍的な発展をとげる。アヘン喫煙の習慣は、イランでは都市の上、中層にみられたが大衆的ではなかった。したがってケシの生産はほとんどが輸出を目的としている。とくにアヘン戦争以降、中国のアヘン市場が開けたことが生産と輸出増の主たる契機となった。当時ケシの収益性はきわめて高く、単位面積当たりの粗収入は小麦の3～6倍に及んだといわれている¹⁰⁰⁾。この高収益性が地主・商人をしてケシ作導入に向かわせた。

この時期のケシ作地拡大の特徴としては桑や綿作からの転作という形で展開した点にある。すでにみたように、蚕の微粒子病の蔓延と生糸価格の下落によって1860年代後半以降、養蚕は衰退過程をたどった。生糸の生産は70年代にはピーク時の3分の1に縮小した。転作はギーラン地方では主に桑から米であり、アヘンへの転作はヤズドにおいて典型的にみられた。

1869年のあるメモによると、「近年ペルシアのケシ産業は相当に発展している。今日、この国からの輸出は1860年の2倍を数えると推定される。……今日、ペルシアでは気候がケシ生産に適した諸県で広く耕作されている。たとえば以前はほとんどケシ作地がなかったテヘラン周辺地域で広大な耕地がケシ作に割り当てられており、王国全体でケシ生産の着実な増加が進展している。」¹⁰¹⁾1860年代末にはケシの生産量はヤズドが最も多く全国の50%を占めた。1874年のペルシア湾行政報告書には「ヤズド地方は、耕作可能な土地が相当ある。しかし、人工的な灌漑の手段が不十分なためケシ耕作をこれ以上拡大する可能性は小さい。」と述べられている¹⁰²⁾。すでにケシがヤズド地方の耕地をかなりうめつく

していたことを想定させる。

綿花畑もまたケン作地に転用されたと考えられる。イギリス綿布の流入によって都市の綿工業は衰退しはじめ綿花の国内需要はこの過程で縮小した。また一方綿花輸出も1860年代後半、綿花飢饉が終息したことで急減した。つまり綿花需要は国内、国外の両方で縮小し、ケン作は収益性が低下した綿花の作付地にも侵入したのである。

1870年代後半になるとケン生産は急上昇する。輸出は1880年に84.7万ポンドに達し、70年代はじめと比べると6倍以上に伸びている。これにはインドの不作によるアヘン価格の上昇が影響していると思われる。1878/79年の行政報告によると、「数年前まで中国に輸出されたペルシア産のアヘンは140ポンド当たり280~350ドルを越えることはなかったが、最近では500~615ドルにまで上昇した。」¹⁰³⁾

表16 ケシの生産量 (単位 shahman)

	1868/69年	1879/80年
ヤズド	7,500	15,000
イスファハン	5,000	37,000
ホラーサン	1,400	14,000
カーシャン	250	
テヘラン	200	
ケルマン	150	4,500
ヘラート	1,000	
シーラーズ		20,000
ネイリーズ		6,000
カーゼルン		1,500
シューシタル		1,500
計	11,500	99,500

(出所) 1868/69年については Thomason, R., Memorandum on Opium Trade of Persia, 1869, in EHI, p. 241. (Chicago, 1971). 1879/80年については Report on the Administration of the Bushire Residency (Culcatta, 1874).

1868/69年から1879/80年にかけて、ケシの生産量はイラン全体で6.4倍に増えている。この間ヤズド地方は2倍の増加にすぎないが、最大のケシ生産地となったイスファハンは7.4倍に増え、シーラーズは1860年代末から生産を本格化して第2のケシ生産地に発展している。この頃になるとケシ作地は、桑や綿花の転作による拡大からイラン各地の灌漑耕地に普及し、全国的な農産品として発展していた。

乾燥地や半乾燥地では、ケシは年間降水量がおおむね400ミリを切る地方に作付けられる灌漑作物の範疇に入る。したがって水利条件の悪い限界地での生産は困難で、村落耕地の中の比較的優良な土地がケシ作に利用されることになる。灌漑可能な未利用地が存在しない場合ケシ作地の拡大には、転作などによる土地利用の転換の方法によらざるを得ず、ケシは既存の耕地に導入されることになる。

一般にケシは小麦との間に輪作方式がとられることが多く、ケシ作と小麦作と休閑を繰り返す作付け体系がとられる。ケシは地力収奪の作物であるために、この体系では休閑期間を多くとる必要があり、必然的に麦作地を縮小させる結果となる。

ケシはまた労働力の面でも他の作物と競合する。小麦と比べるとはるかに労働集約的であり、とくに収穫作業に大量の労働力を要する。ケシの播種期は9月から10月にかけての時期であり、翌年の5月から6月にかけて結実する。実はナイフで傷つけられその液が収穫される。この収穫作業はこまかな手労働であり家族労働だけでは不十分で、外部労働力に依存することが多い。この時期は夏作の準備と播種期、また休閑地の耕起の諸作業の時期と重なる。つまり労働面で既存の作物と競合することになる。

数字で示すことはできないが、ケシ作地が拡大した1860年代後半以降、イランの小麦生産は大幅に減少したと推定される。1870年代にイランでしばしば大飢饉が起こっている。乾燥地、半乾燥地では降水量の毎年の変動で生産量が

きく影響をうける。5, 6年に1度は旱魃による不作の年がある。しかし、この不作を大飢饉に至らしめた主要な原因としてはケシ作の拡大に伴う食料作物、とくに小麦の作付け地の縮小と粗放化があったと言われている¹⁰⁴⁾。1870~72年の飢饉では人口の1割が飢えて死亡したが、ケシ作の影響はとくに1879年の大飢饉において大きかった。食料不足と小麦やパンの高騰は政治的、社会的な混乱を引き起こし、暴動と反政府的動きの中で政府はケシ作の規制を余儀なくされている。イラン南部のファールス地方では1876~77年に知事がケシ作の禁令を出し小麦生産に戻す努力を払った。しかし、十分効を奏さずにケシ作はその後も拡大した¹⁰⁵⁾。

ケシは従来の作付け体系を崩す形で既存の耕地に導入されただけでなく、新規の農地開発を進める方向でも広がった。ケシの高い収益性は地主や商人に農耕地開発の動機を与えた。国有地の払い下げなどで土地を取得し、灌漑施設へ投資をおこない未耕地やまた荒廃した村の開発がすすめられた。すなわち、アヘン輸出の発展は商品作物であるケシを全国的に広め、農村における商品経済化をすすめるとともに、農産物の商品化を契機とした地主制を発展させた点で、イラン社会に与えた影響は大きかったといえる。

しかし、アヘンの輸出は図3にみるように、1880年代はじめをピークに減少し、一定水準で推移して再び拡大することはなかった。これには後に述べるように中国による貿易制限があったが、国内的要因も大きかったと考えられる。ケシは既存の耕地に食料作物を侵害する形で普及したが、19世紀を通して農業生産技術の発展や生産性の向上がみられず、食料需給のバランスをくずした。すなわちケシ作地の拡大が逆に小麦や大麦の価格の上昇を招いた。例えば、ホラーサン地方における小麦と大麦の価格は、1860年代から1905年の間に14.5倍に上昇したといわれている¹⁰⁶⁾。これは、エジプトの綿花生産の発展が、灌漑システムへの投資による耕作地の拡大と生産性上昇を伴ったのと対照的である。

図5 イランからのアヘン輸出額の推移



(出所) Seyj, A., Commercialization of Agriculture, (Middle East Studies, 16, 1984)
pp. 246-247

また一方で、イラン産アヘンの価格は19世紀末には下落しはじめた。この一つの理由として、質の悪化がある。商人が混物をするなどしたために、国際市場での価値を低下させた。1890年には、質が悪いために輸出したアヘンが中国から送り返されている。また1905年には、イラン産アヘンのボンベイ市場での評判は全く地に落ちていた¹⁰⁷⁾。つまり他の作物と比べてケン作の有利性は絶対的なものではなくなったのである。

さてケン作の普及に関しては、世界経済におけるアヘン貿易の位置づけが必要となる。19世紀には、アヘンはイギリス—インド—中国の三角貿易の一環を担う産品として重要性をもった。イギリスと中国との貿易では茶、絹、生糸が中国からイギリスにむけて輸出されたが、イギリス綿布は中国市場に容易に入り込めなかった。イギリス綿布が中国を席卷できなかった理由については論争のあるところでありここでは割愛するが、この二国間の貿易ではイギリスの入超であったわけである。一方イギリスのインド貿易は綿製品輸出によって輸出

超過であり、インドから中国へのアヘン輸出をその間に媒介することで貿易バランスの調整を計ったのである。

インド産アヘンの輸出は、中国市場がアヘン戦争でイギリスによって暴力的に開かれた1840年代以降急増している。イラン産アヘンもまたこの開かれた中国市場に向けて輸出された。主な輸出港はペルシア湾のブーシェールとバンダルアッバースで、中国向けはここから一旦スエズに送られ積みかえられてホンコンとシンガポールに運ばれることが多く、これはインドの港での課税を避ける目的があったといわれている¹⁰⁸⁾。中国以外にはヨーロッパにも輸出された。ロンドン向けのアヘンはイギリスで消費されるかイギリスからヨーロッパ大陸やアメリカに再輸出されたが、そのシェアはアヘンの輸出が増えるにしたがって低下した。イラン産アヘンはインド産よりも価格が安かったために需要が大きかった。

1874/75年の輸出（仕向け先）

	Case	
ホンコン	1,339	
シンガポール	60	
ロンドン	583	109)

ところでアヘン輸出がイギリスとの関係において何故可能であったか。これにはイランとイギリスの貿易の不均衡に触れる必要がある。イギリス産の綿布が大量に流入して以降、イランの対イギリス貿易収支は終始きわだった入超傾向を示した。1850年には輸入が146万ポンドであったのに対して、輸出はその3分の1の53万ポンドにすぎず片貿易的性格をもっていた。イランのおもな輸出産品であった生糸は1860年代半ばに輸出を急減し、この傾向はその後さらに進んだ。アヘン輸出が拡大した後の1889年にも輸入が390万ポンドに対し、輸出は210万ポンドで170万ポンドの入超であった。イランからの金の流出は激しく、宮廷の浪費も重なってイランはほとんど破産の状況を呈していた。アヘン

はその輸出によって貿易均衡をはかる一手段たり得た点で、イラン、イギリスの相方にとって奨励さるべき産品であったのである。

飢饉の時代にケン栽培を制限する政府の条令が出されたが、実質的な貿易制限はされていない。政府はアヘン輸出で莫大な関税収入を得ることができたからである。イギリスも、イラン産アヘンがインド産アヘンと競合するにも関わらず、中国市場への輸出を妨害しなかった。したがって、イランのアヘンはインドの不作期に輸出を伸ばすという短期的傾向はみられるが、長期的にはインド産アヘンの輸出の推移と平行に輸出額を推移させている。インドから中国へのアヘンの輸出はアヘン戦争後急傾斜で伸びたが、1880年を境に急落する。この理由としては第一に、1860年頃から登場した中国産アヘンの品質が良くなって輸入アヘンと競争力をもってきたこと、第二に1887年からのアヘンに対する厘金の導入による高い税金が課せられたことがあげられる¹¹⁰⁾。このインド産アヘンの輸出動向は、まさにイラン産輸出の動向を示唆している。1880年代後半に輸出は急落した。しかしその後も輸出は続いた。

- 1 Lafont, F. & Rabino, H., *L'industrie sericole en Perse*, 1910 (Issawi, C., ed., *The Economic History of Iran 1800-1914*, Chicago 1971, 以後 EHI と略す) p. 235
- 2 I. ウォーラースティン (川北稔 訳) 『近代世界システム II』岩波 211~213 ページ (Wallstein, I., *The Modern World-System*, 1974)
- 3 永田雄三「歴史の中のアーヤーン」(『社会史研究』7号, 1986年12月)
- 4 Ashraf, A., *Historical Obstacles to the Development of a Bourgeoisie in Iran* (Cook, M., ed. *Studies in the Economic History of the Middle East*, Oxford 1970) pp. 308~327
- 5 Abrahamian, E., *Iran Between Two Revolution*, Princeton 1982, pp. 11~36
- 6 Owen, R., *The Middle East in the World Economy 1800-1914*, London 1981, p. 85
- 7 Malcolm, J., *The Melville Papers*, London 1830, in EHI, pp. 262~267
- 8 Glamman, K., *Dutch-Asiatic Trade, 1620-1740*, Hague 1958, pp. 117~120
- 9 *Report on the Administration of the Bushire Residency, 1873-74*, Calcutta, p. 7

(以後 RABR と略す)

- 10 ダウ船は60~100トンの木造帆船である。モンスーンと海流を航海周期として、インド洋を西は東アフリカ、東はインド東岸に至る沿岸地域を航路として交易に主要な役割を果たした。歴史は古く、イスラム以前に遡ると考えられ、今日も残存している。このダウ船によるインド洋交易は、いわばインド洋文化圏ともいふべき一世界を形成した。ダウ船とダウ交易については家島彦一「インド洋世界とダウ」(『季刊民族学』No. 7, 1979)を参照
- 11 Three Reports of the Select Committee Appointed by the Court of Directors, in EHI, pp. 85~86
- 12 Chaudhuri, K., *Trade & Civilization in the Indian Ocean*, Cambridge, 1985, pp. 185~187
- 13 Lambton, A., The Case of Hajji Nur Al-Din, 1823-47, A Study in Land Tenure (*Bulletin of the School of Oriental & African Studies*, Vol. 30, part 1, London 1967) pp. 54~56
- 14 Amanat, A., ed., *Cities & Trade; Consul Abbott on the Economy & Society of Iran 1847-1866*, London 1983, pp. 131~132
- 15 Novichev, A., Ocherki Ekonomiki Turtsii, Moscow 1937 (Issawi, C., ed., *The Economic History of Turkey 1800-1914*) p. 300
- 16 Malcolm, *op. cit.*, pp. 262~263
- 17 EHI, p. 130
- 18 *ibid.*, p. 130
- 19 MacGregor, C., *Narrative of a Journey through the Province of Khorasan*, Vol. 2, p. 389
- 20 EHI, p. 130
- 21 Willock to Canning 7 July, 1824, in EHI, p. 90
- 22 EHI, p. 130
- 23 Curzen, *Persia and Persian Question*, London, 1892, Vol. I, p. 367
- 24 Nashat, G., From Bazaar to Market (*Iranian Studies*, Vol. 14, No. 1-2, 1981) p. 53
- 25 Curzon, *op. cit.*, I, pp. 524~5
- 26 Macdean, H., Report on the Conditions & Prospects of British Trade in Persia, 1904, in EHI, pp. 196~199
- 27 Curzen, *op. cit.*, II, p. 564

- 28 McNeill to Backhouse, 1840, in EHI, p. 99
- 29 Tabreez Report by Consul General Jones, 1873, in EHI, pp. 112~116
- 30 Abbott, Report on Trade for 1841, in EHI, pp. 118~120
- 31 砂糖, 茶の消費は19世紀後半にさらに増加傾向を強め, カーズンは1890年頃に「イランでは砂糖はきわめてわずかしか生産されていない。コーヒーと茶は全く栽培されていない。しかし, 砂糖と茶の消費は莫大でコーヒーもかなりある」とのべている。Curzen, *op. cit.*, II, p. 560
- 32 EHI, pp. 108~109
- 33 Entner, M., *Russo-Persian Commercial Relation 1828-1914*, Florida 1965, p. 13
- 34 Abbott, Remarks on the Trade of Tehran, 1848, in EHI, p. 117
- 35 こうした批判者としてエントナーは次のようにのべている。「1900年までロシア・トルコ貿易はロシアの赤字であった。ロシアは1840年以降のほぼ40年間も確かに「積極的な」役割を果たした。……しかし, 我々はトルコマンチャイ条約をアブリオリにロシアに有利な不平等条約とする評価にたいしては, 再検討をしなければならない。ペルシアは, その北の隣国と原料, 製品のいずれをも貿易した。そして長期にイランは工業製品を購入以上にロシアに売却している。1840年には, ペルシアは輸入の19倍もの綿製品をロシアに輸出した」19倍という数字は再輸出を控除していない数字であるが, 経済, 貿易関係に関するかぎりトルコマンチャイ条約はロシアに有利に作用しなかったといつてよい。Entner, M., *op. cit.*, p. 10
- 36 Issawi, *op. cit.*, p. 301
- 37 コーカサス・ルートに関しては, curzen, *op. cit.*, II, pp. 555~557
- 38 Entner, *op. cit.*, pp. 22~23
- 39 フォルカサス, M. (大河内監訳)『ロシアの工業化』日本経済評論社, p. 82(Falkus, M., *The Industrialization of Russia 1700-1914*, London 1972)
- 40 ロシアのトルキスタン地方の征服は, 1868年にブハラ, 73年にヒヴァ, 76年にコーカンドがそれぞれロシアの保護国化または併合された。綿花をロシア中央部の工業地帯に運んだのは1880年にカスピ海沿岸を起点として建設された中央アジア鉄道で, 86年にアムダリアまで, 98年にはタシケントまで開通した。木村, 山本『ソ連現代史II』山川, 1979
- 41 EHI, p. 243
- 42 岡崎正孝, 「1870-80年におけるエスファハーンの工業」(『足利博士喜寿記念論集』図書刊行会, 1878) 92ページ
- 43 RABR 1873/74, p. 19, RABR 1895/96, p. 21

- 44 Curzen, *op. cit.*, 2, II, 557
- 45 坂本勉, 「19世紀イスファハンの都市構造とメイダン」『史学』51巻, 1981, 145
ページ
- 46 同上, 145~146ページ
- 47 同上, 145ページ
- 48 岡崎, 前掲論文13~94ページ
- 49 Polak, J., *Persian, das Land und seine Bewohner*, 1865, in EHI, pp. 112~116
- 50 イラン織物工業の衰退に関しては, 岡崎, 前掲論文, 坂本勉, 前掲論文を参照
- 51 Curzen, *op. cit.*, II, p. 41
- 52 Nachat, G., *From Bazaar to Market, Iranian Studies*, 14-1, 1981, p. 63
- 53 Frazer, J. B., *A Winter Journey from Constantinople to Tehran*, Vol. 2 London,
1838, pp. 151~152
- 54 アブラハミアンのイラン社会論, 村落社会論に関しては, *Oriental Despotism :
The Case of Qajar Iran, Journal of Middle East Studies*, 3-31, 1974 参照
- 55 Frazer, J. B., *An Historical and Descriptive Account of Persia From the Earliest
Ages to the Present Time*, 1833, p. 303
- 56 Curzen, *op. cit.*, II, p. 560
- 57 坂本, 前掲論文, 51-3, 55ページ
- 58 同上, 57ページ
- 59 Polak, J. *Persian, das Land und seine Bewohner*, EHI, in EHI, p. 271
- 60 *ibid.*, p. 271
- 61 Curzen, *op. cit.*, II, p. 336
- 62 Gilber, G., *Persian Agriculture in the Late Qajar Period, 1806-1906, Asian and
African Studies*, 12-3, 1978, 353
- 63 *Report on the Silk Trade of Ghilan*, 5, May, 1892, in EHI, p. 233
- 64 *ibid.*, p. 233
- 65 *ibid.*, pp. 235-6
- 66 Gilber, *op. cit.*, p. 349
- 67 *Tabteez-Report by Consul-General Jones*, 1873, in EHI, p. 113
- 68 Abbot, A., *Silk Trade*, 1865, p. 611
- 69 *Abbot to Thomson*, 5, April, 1870, in EHI, p. 227
- 70 Gilber, *op. cit.*, 353
- 71 *ibid.*, p. 353

- 72 *ibid.*, p. 346-7
- 73 *ibid.*, p. 348
- 74 Entner, *op. cit.*, pp. 59-60
- 75 Abbot, Gilan, 1865, in EHI, p. 242
- 76 EHI, p. 242
- 77 ギーラン地方の米の生産量は、1872年の17.7万トンから1878年には13万トンに減少している。(Gilber, *op. cit.*, p. 320)
- 78 Gilber, *op. cit.*, p. 321
- 79 Entner, *op. cit.*, p. 10, 78
- 80 木村, 山本, 前掲書, 18ページ
- 81 Amanat, A., ed., *Cities & Trade; Consul Abbott on the Economy & society of Iran 1847-1866*, London 1983, pp. 158~209
- 82 Curzen, *op. cit.*, II. p. 497
- 83 EHI, p. 246
- 84 *ibid.*, p. 245
- 85 Curzen, *op. cit.*, II, pp. 496~497
- 86 Abbott to Russel, 20 Feb., 1863, in Issawi, C., ed., *op. cit.*, p. 246
- 87 Tamara, M. Ekonomicheskoe Polozhenie Persi, 1895, in EHI, p. 247
- 88 RABR 1891/92, p. 20
- 89 Ellison, *The Cotton Trade of Great Britain*, London 1886, p. 69, 100
- 90 Crouchley, A. E., *The Economic Development of Modern Egypt*, London 1938
- 91 Gilber, *op. cit.*, p. 355
- 92 Tomara, *op. cit.*, in EHI, pp. 250~251
- 93 RABT 1894/95, p. 29
- 94 Gilber, *op. cit.*, p. 356
- 95 1910~13年のイランからロシアに向けて輸出された綿花は年平均で156万ブードであり、一方同期間のロシアの綿花消費は平均2,380万ブードであった。(Entner, *op. cit.*, p. 73, Falkus, M., *The Industrialisation of Russia 1700-1914*, 1972 (大河内 暁男訳『ロシアの工業化』) 82ページ
- 96 岡崎, 前掲論文, 72ページ
- 97 Curzen, *op. cit.*, II, p. 499
- 98 岡崎正孝 前掲論文, 73ページ
- 99 同上, 73ページ

東洋文化研究紀要 第107冊

- 100 EHI, p. 239
- 101 Thomson, R., Memorandum on Opium Trade of Persia, 1869, in EHI, pp. 240~241
- 102 RABR 1874/75, pp. 26~27
- 103 RABR 1878/79, p. 31
- 104 RABR 1874/75, p. 27
- 105 岡崎, 前掲論文, 76~77ページ
- 106 Seyf, A., Commercialization of Agriculture, (*Journal of Middle East Studies*, No. 16 1984) p. 239
- 107 *ibid.*, pp. 246~248
- 108 RABR 1874/75, p. 27
- 109 RABR 1874/75, p. 29
- 110 加藤祐三『イギリスとアジア』岩波 1980, 150ページ